

蘭船我國に漂着す

長五年我國に漂着し、折しも徳川幕府創業の際に當り水師提督ウリアム・アダムスは幕府に召されて大に厚遇せられ

William Adams

蘭人我國の外國貿易權を掌握す

日蘭通商の許可を得たり、當時我國の外國貿易は葡西二國の手に在りしが慶長十七年耶蘇教禁令と共に葡西兩國が我國を追放せらるゝに乗じて蘭人は百方幕府の好意を得んことを務め、遂に我國の外國貿易を專有するに至り、徳川幕府三百年の鎖國時代に我國と外國との交通貿易を司りたるは獨り和蘭人あるのこにして其我國の開國に裨益せる所尠からず

蘭人臺灣を占領す

蘭人は又支那貿易の特權を得んと欲し葡人の殖民地なる媽港の湊を屢々襲ひたれども果さず、遂に支那帝國に迫りて一六二四年臺灣島を占領し臺灣府にゼーランヂヤ城を

Zealandia

臺灣島再び支那に歸す

築きて根據となし以て日本支那貿易の互市場たらしめたり、然れども四十有餘年の後支那明朝の遺臣鄭成功の爲めに征せられ蘭人悉く追はれて臺灣嶋は再び支那帝國の治下に歸するに至れり、此頃蘭人は東印度地方にも殖民せんことを企てたりしが當時既に英佛の二國争ふて印度に着目せる折ありしを以て事容易に成らず、蘭人は畢竟ジャワ島を本據として支那並に日本との貿易を專有するに過ぎざりき。

第九章 英國の革命

英王エリザベス一世

英王エリザベス(一五五八—一六〇三)の時代は英國の黄金時代と稱し國威文運の隆盛を極めたりしが王殂してゼームス一世スコット

James I.

Scott-



チャールズ一世の無道

トランドより迎へられて英王の位を踐み放肆に耽り姦臣  
 權を專にせしかば大に國民の感情を害し國會は屢々王の  
 意見を異にして互に相容れざること多し、ゼームスの子ナ  
 ヤーレンス一世立ちて無道父に勝り王權の神聖なるを主張  
 Charles I. して之を固執し國會が王命を奉せざるを憤りて之を解散  
 し、ストラフフォード及ひ大僧正ラウドの兩人を用ゐて專  
 横の政を施し課するに苛税を以てし高等法院を設けて濫  
 りに良臣を罪し、憲法の紊亂其極に達せしかば民心全く王  
 室を去りて只管時運の轉變を啣つに至れり、  
 一六四〇年チャールズ一世はスコットランドの宗教叛亂を  
 鎮定せんことを欲し國會を召集して軍費を要求したり、然るに  
 開會の即日國會は直に其要求を否決せしかば王は忽ち之

短期議會

長期議會  
國會大に  
王權を制  
限す

王黨と國  
會黨との  
衝突  
王黨敗れ  
てチャー  
ルス王勝  
となる

を解散したり、世に之を短期議會と稱す、王更に同年再び國  
 會(之を長期議會と稱す)を召集して軍費の支出を議せしめたるに國  
 Long Parliament. 會は先づ王權濫用を彈劾し、爾今國會は王命に依りて漫り  
 に解散する能はざることを議定し、高等法院の廢止を可決  
 し、着々として王權の制限に力を注ぎしかばチャールズ王  
 大に憤り遂に事を干戈に訴へ、王黨を集めて國會撲滅の策  
 を講し始めたり、此に於て國會は社會の安寧を維持するを  
 名として兵を募り、此に王黨と國會黨との間自ら衝突を來  
 すに至れり、王黨は主に固陋の貴族より成り國會黨は一般  
 國民の輿望より成れるを以て勝敗の數始めより明らかに  
 して國會黨勝を制して王チャールズは虜にせられたり、國  
 會黨中過激にして共和的の意見を有するものは獨立黨と



クロムエル  
チャーレス  
ス王死刑  
に處せら  
る  
英國共和  
政府に變  
す

英國共和  
時代の隆  
盛

し、オリヴァー、クロムエル其領袖たり、クロムエル勇武絶倫、一六四八年部下の將士を指揮して國會を解散し、チャーレス王を法廷に導きて其罪を斷し、翌年遂に王を死刑に處したり、王無道なりしに雖も其末路又衰むべきなり、  
チャーレス王殂して英國の政府一變して共和政治となりぬ、クロムエル即ち共和政府の保護者となりスコットランド及ひアイルランドに起れる叛亂を悉く鎮定し、一六五一年航海條令を發布して外國の輸入品を防ぎ、爲めに當時商權を專有せる和蘭と交戦するに至り、和蘭の艦隊敗れて英國は世界屈指の海軍國と變したり、此の如くクロムエルは常に内國の治蹟を擧ぐるに止らず國威を海外に宣揚せんことを務めしを以て當時英國の隆盛大に見るべきものあり、

舊王朝復  
興せらる

チャーレス二世

ゼームス二世

オレンジ公ウヰリアム英王  
となる

然れどもクロムエルの死するや其子孱弱にして父の業を繼ぐに足らざるを以て國內忽ち亂れ舊王朝遂に復興せられてチャーレス一世の子チャーレス二世入りて王位に登り、チャーレス二世父に倣ふて無道、舊教に拘泥して新教を壓せしかば新教徒はホイッグ黨自由黨を組織して王命に抗し舊教徒はトリー黨保守黨を組織して王に加袒するに至り、爾來兩黨の軋轢甚しく國內亦穩かならざりき、

チャーレス二世殂して皇弟ゼームス二世即位す、暗愚無道遙かに前代に勝りしかば國民一般之を憤り遂に王を廢して和蘭のオレンジ公ウヰリアム及び其妃メリー二世(ゼームスの女)を迎へ立て、英王と爲す、一六八八年ウヰリアム其妃メリーと共に英國に來りて王位に登りウヰリアム三世と稱す、王賢明

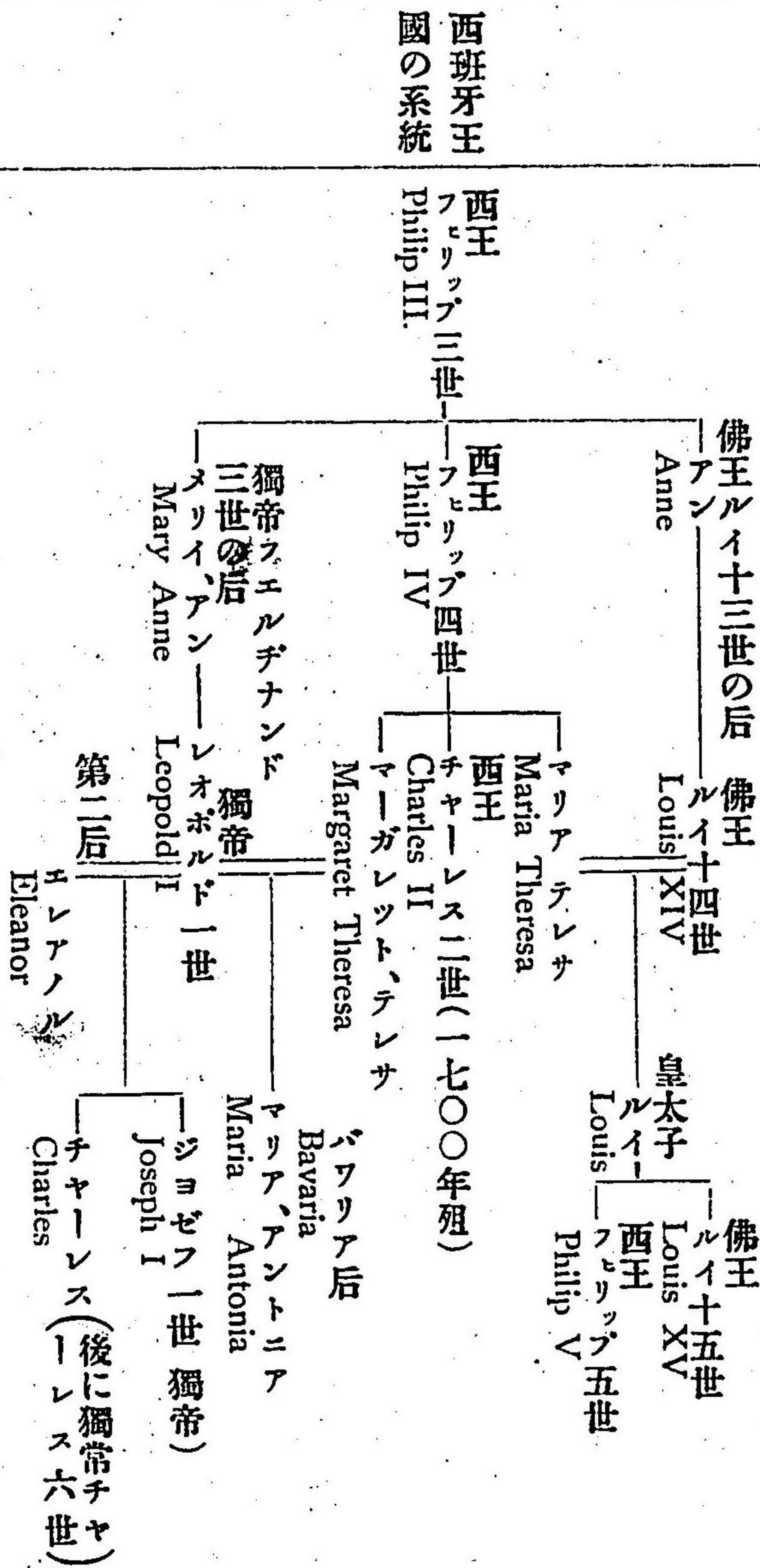


立憲政治の模範多く此時に生ず

にして時勢に通じ、在位十有餘年、憲法を改正し、國民の輿望を容れて十三條の法令を設け以て王權を制限し、其他宗教の制を定め、出版の自由を許す等苟も立憲王國の採て模範と爲すべき者多くは此時に生じたり、英國に於ける政治の進歩と社會民權の發達はウリアム三世の治蹟に基するや蓋し疑無し、

William III.

第十章 西班牙王位繼承の乱と佛國の衰運





ルイ十四  
世西、佛、  
合同の策  
を講す

列國佛王  
に抗す

列國同盟  
して佛國  
に衝る

一七〇〇年西王チャールズ二世殂して嗣無し、此に於て王の遺言に依りて皇姉マリア、テレサの孫フェリッポ西王の位に登りフェリッポ五世と稱す、初めフェリッポの西班牙皇嗣に定まるや佛、西、兩國は決して合併する無きの條件たりしに時恰も佛王ルイ十四世は佛國の隆盛を圖るに汲々たる折なりしかば此機に乗じて西、佛、合同の策を講じ始めたり、斯くては列國の權衡を害すること甚しきを以て列國はルイ十四世の政略を肯んせず、獨帝レオポルド一世は西王チャールズ二世の義弟に當るの故を以て其次子チャールズに西王の位を踐ましめんことを主張したり、英、蘭、葡、サヴイの諸國は當時何れも佛國の威勢を恐るゝの折なりしを以て舉て獨乙に賛意を表し以て佛國の勢を打破せんことを務めたり、

王位繼承  
の亂

ルイ十四  
世大敗し  
たれども  
猶戰ふ

形勢一變  
す

事態此の如きを以て遂に干戈に訴へて事を決するの止むべからざるに至れり、世に之を西班牙王位繼承の乱と稱す、戰始まるや佛國は獨、英、蘭等の聯合軍に衝らざる可らず加ふるに英將マールボロウ及びサヴイのユージェン親王共に非凡の勇才を懷きて軍を指揮せしかば佛軍如何にもする能はず、ウーデナルド及びマルプラケの二大決戰に佛軍殆ど殲きてルイ十四世今や媾和の外爲す無きに陥りしも聯合軍の要求過大なりし故に依然戰を續けたり、偶々英國に於て内閣の更迭起りてマールボロウ將軍其職を免せられ、又獨帝ジョゼフ一世不意に歿して其弟チャールズ位を繼ぐに至りしかば事情爲めに一大變動を來し、獨國は今や西王の位を要求する能はざるに至れるを以て聯合諸國は自



ウトレヒトの條約

ら其同盟を解き、遂に佛王ミットレヒトに和議を講ずるに至れり、時に一七一三年なり、翌年ラスタットの條約に依りて獨乙も之を承認したり、

王位繼承

Philip V

亂の結果

此條約に因りて、フリップ五世は西王の位に登る。雖も佛國と合同すること能はざるを定め、佛國は北米殖民地を英國

に讓與し、西班牙のジブラルタル海峽も爾來英國の領に歸

Gibraltar

し、獨乙のブランデンブルグ公は普魯西亞の王號を認定せ

Prussia

Brandenburg

られ、其他和蘭、サヴォイ等各多少の領地を得、墺國は西班牙領

ネザールランド及び伊太利の諸州を得たり、之に反して佛國

佛國の衰運

はルイ十四世の晩年國庫大に疲弊し、ウトレヒト條約の翌年ルイ十四世歿するや佛國の國債堆積して兵力消沈し、國民亦窮迫を感じるの有様なりき、ルイ十四世即位の初め列

諸國の米國に於ける殖民

國を聳動したる佛國當時の威勢は今や佛國を去りて對岸なる英國の手に移るに至れり、

第十一章 英佛の東西兩洋に於ける殖民

葡國は新陸地の發見有てより漸次に北米の東岸に殖民し、

西國は初め西印度諸嶋及び南米地方に殖民したりしが後

に北米フロリダ地方を占領して新根據地を作れり、尋て佛

Florida

國はフランシス一世の當時殖民獎勵の結果として屢々北

Francis I

米に航し、遂にセント、ロウレンス河畔に確然たる殖民地を

St. Lawrence

設けたり、是より先き英國は東印度航路を發見せんとして

北米の沿岸に觸れ、一五八四年ウォーター、レイ始めて殖民

Walker Raleigh

地を創設せんことを企てたれども二たび事成らずして遂

英佛の米國殖民



に止みたりしが Bartholomew Gosnold、Cod、Virginia を發見してワージニア會社なる者を組織し始めて此地に殖民を設けたる以來英國の殖民漸次其根據を固ふするに至れり、

爾來歐洲の自由國民は新陸地に領地を得て自由の生活を營まんこの素志を懷きて北米に移住する者縷々して絶へず、殊に英人を最とし、和蘭、スウェーデン等の國民多く來りて遂

に新ネザerland、New Sweden 等の殖民地を設くるに至れり、されば十七世紀の頃には夥多の殖民地北米に其境を接

したりしが時勢の變遷は自ら是等殖民地の盛衰を來し、葡

西の兩殖民地は本國の衰頹と共に其勢消沈し和蘭、スウェーデン等の殖民地は漸次英國に併せらるゝに至り十七世紀の

歐洲諸國の殖民地

殖民地の盛衰

英殖民地の状況

東洋に於ける英佛殖民

中葉には英佛の兩殖民地南北に其勢を振ひ互に領土の擴張に務むるの有様なりき、而して英殖民地は本國よりの監督寛なりしを以て時勢に應じて憲法を制定し、英國革命以來自由民主の思想大に發達し政治、宗教の上著しく其影響を及ぼせり、後に一七一三年ウトレヒト條約の結果に依り佛國殖民地の一部は遂に英國に併せらるゝに至りぬ、

翻て東洋に於ける英、佛兩國の殖民を察するに佛國は一六一六年東印度商會を創立して印度貿易を企てたれども事意の如くならずして一時其念を斷ちたりしが十七世紀の末に印度の南方 Pondichery の領地を購ふに至りて此に印度殖民の根據を作り、漸次隆盛に赴き、Dupleix 其總督となるに及びて益々勢を振へり、英國はエリザベス朝の頃 Elizabeth



英人我國  
と交通を  
開く

クライヴ  
の事業

より東洋交通に着手し、初めジャワ島のバンタム府に殖民  
せしに一六五八年コロマンデル沿岸のマドラス附近の地  
を得るに至りて此に堅固なる城壁を築きて東洋殖民の本  
據こそせり、英人は亦此頃我國とも交易を開きたれども蘭人  
に妨げられて忽ち衰へぬ、一六六八年英國は葡國よりボム  
ベイ島を得十七世紀の末にカルカッタを占領したりしに、隣  
邦ベンゴールの領主之を嫉みて英人を排斥せんことを圖  
りしかばマドラスの總督クライヴ直に討ちてカルカッタを  
復し、尋て佛國の殖民地なるチャヤンダーナゴールを占領し、  
クライヴは後屢々ベンゴールの叛を討してカルカッタ總督  
となり、一七五七年プラサセイの大戦に遂にベンゴールを  
殉へたり、  
Plassey

印度の施  
政

ヘスチン  
グ印度總  
督となる

印度帝國  
の基礎成  
る

此の如く英國東印度商會は今や宏大たる領土を印度に有  
するに至りては自ら之が施政の必要を生じ、一七七三年英  
國政府は遂に印度に干涉するに至り、英國々會は印度條令  
を可決してマドラス、ボムベイ、ベンゴールの三區域を合併  
して之を一總督の下に統御せしむることこそせり、此時第一  
代印度總督の重任を拜したるはワーレン、ヘスチング其人  
にして沈毅にして勇略あり着々として印度殖民の完成を  
圖り遂に英國の威勢をして全印度に及ぼさしむるに至り、  
將來印度帝國の基礎を完ふしたり、

第十二章 魯西亞の勃興

魯西亞帝國は曩にルーリック王朝の絶ゆるに當りて王位繼  
Rurik



ローマノ  
フ家

ピーター  
大帝

承の争起りしが一六一三年ローマノフ家のミケール撰はれ  
て王位に登りしより漸次歐州列國に重きを爲すに至り、十  
八世紀の初めピーター大帝即位するに至りて富強の基礎  
を鞏固ならしめたり、  
Peter the Great

ピーター  
の事業

ピーター大帝英邁にして時勢に通達し、魯國を起して歐州  
列強の一たらしめんと欲し、西歐文物の輸入と國土の擴張  
に必生の力を注きたり、軍備を組織するに當て總て法を西  
歐の軍制に採り新たに海軍を設け、外人を聘して工業の發  
達を圖り、學校を興して人智を増進し、風俗習慣悉く西歐に  
倣ひ、帝自ら希臘教の管長を兼ね、以て孜孜として國內の改  
良を促かせり、又外に向てはトルコ國と屢々衝突し遂にア  
ゾフ地方を占領して新貿易港を黒海の濱に得たり、帝此に  
Azoff

ピーター  
バルチック  
沿岸に  
海軍を創  
設せんと  
す

北方大戦  
争

於て躬ら西歐に巡遊し、和蘭のザンダムに造船の術を實  
習し、英國に渡りて其海軍の隆盛ある所以を究め、本國に還  
りて益々新進の策を執りしかば國內保守主義の諸侯往々  
之を肯んせずして叛を圖る者ありしがピーターの勇才能  
く之を平定し、此に新式訓練の軍を以てスウェーデンの東部を  
征討し以てバルチック沿岸に堅固なる海軍を創設せんこと  
を企てたり、  
Baltic

當時スウェーデンは歐州の北部一圓の地を領し、王チャールズ  
十二世聰明の聞へありて爲めに内政軍備共に整ひしがピ  
ーター大帝が之と干戈を交へん爲めにポーランド及び  
デンマルクの二國と同盟したるは遂に一七〇〇年に北方大  
戦争を惹起すに至れり、戦始まるやデンマルク人は直にシ  
Denmark Poland



スウェーデン王大に敵軍を破る

スウェーデン軍大敗す

ユレスヴグを襲ひ魯兵はエストランドに侵入したり、此に於てスウェーデン王はゼーランドに突進してデンマルク人を破りてトラウエンダールに和議を締結し、直に軍を轉して魯國に向ひナルワの大戦に魯軍を破り、進んでポーランドを討ちて遂に之を占領し王オーガスタス二世を廢してレスチンスキを立てたり、此間に魯帝ピーターは東方の沿岸を占領して一七〇三年バルチック海の東端にセント、ピーターズブルグ府を創立したり、スウェーデン王此を見て兵を南魯に進めコサック兵を煽動して魯帝に叛せしめ相合して魯國を攻めんことを謀りしに偶々嚴冬到りて糧食爲めに乏しく、一七〇九年プルトワの戦にスウェーデン軍大敗し王チャールス十二世は逃れてトルコに投じたり、チャールス王はトルコ

スウェーデン王遂に魯國と和を締す  
北方大戦争の結果

を誘ふて魯國に衝らしめんことを企てたれども事成らずしてトルコを追はれ漸く本國スウェーデンに歸着するや四面敵の圍む所となり遂に魯國と和議を結ぶに至れり、北方大戦争は其結果ポーランド王を舊位に復し、スウェーデンは莫大の領土を魯國に割讓して爲めに國勢頓に衰頽し、魯國之に代りて北歐に雄視するに至れり、ピーター大帝は都をモスコウよりセントピーターズブルグに遷し、交通貿易の便を開き商工業を奨励して大に國富を増加せしかば魯國の形勢爲めに其面目を一新せり、

第十三章 普魯西亞の勃興

三十年の久しきに亘れる宗教戦争は獨乙帝國の瓦解を來



獨乙帝國  
の瓦解

ブランデ  
ンブルグ  
州  
プロシヤ  
州

し、奧地利國王レオポルド一世及びヒンツェフ一世相繼ぎて獨  
 乙帝位を踐きたれども、只に其名有て其實無く、加ふる以外  
 はトルコ族が帝國の領内に侵入せんことし、又佛王ルイ十四  
 世が餘威を帝國に及ぼさんことせし爲めに、國家の窮乏益々  
 甚し、此時に際して北方に位せるブランデンブルグ、プロシ  
 ヤの一州起りて獨乙帝國の復興を謀らんことせり、  
 Brandenburg-Prussia  
 ブランデンブルグ州は紀元八世紀の頃故フランク王國の  
 一州にして爾來世襲の侯伯之を領し、後に獨乙七撰舉公の  
 一に數へられ、十五世紀の初めポーヘンケルレン家入り  
 て其君公となれり、プロシヤは元々東西に分れ中世時代共  
 にポーランドに隸屬したりしが、一五二五年東プロシヤは  
 Poland  
 時のブランデンブルグ公アルベルトに依りて世襲の公國

フレデリ  
ック、ウ  
ィリアム  
建國の基  
を置く

フレデリ  
ック大王  
父祖の遺  
業を大成  
す

に編入せられ一六一八年君公の繼嗣絶ゆること共にブラン  
 デンブルグ州に合併せられぬ、一六四〇年フレデリック、ウィリ  
 アム立て大撰舉公となり、英明にして時勢を洞察し列國多  
 事の際に當て事を辨する英斷果決にして領土を擴張し文  
 物を増進する等意を國力の發達に注きしかばブランデン  
 ブルグ、プロシヤ州隆盛の基礎此時に成れり、其子フレデリ  
 クの時に王號を承認せられブランデンブルグ、プロシヤ州  
 は爾來變してプロシヤ王國と稱するに至り、節儉力行の譽  
 れ高きフレデリック、ウィリアム一世を経てフレデリック二世即  
 ちフレデリック大王の代に至りて父祖の遺業を大成し、普國  
 Frederick the Great  
 を歐州列強の一に加ふるに至りぬ、  
 フレデリック大王即位の初め奧地利王チャールレス六世殂し  
 Charles VI.



ブラグマ  
チック、  
サンクシ  
ン

サラリク、  
ロウ

フレデリ  
ック大王  
シレジア  
州に侵入  
す

て男嗣無し、是より先き墺地利王はブラグマチック、サンクシ、ンと唱へる法令を制定して女統をして墺國の王位を繼かしめ得ることを定めたり、此令に依りチャーレス六世の殂するや其女マリア、テレサ立て位を繼ぐ、然るに従來獨乙帝國にはサラリク、ロウと稱し男統のみ王位を襲くの憲法古へより備はれるを以て獨乙の諸王侯は墺國の處置を肯んぜず、各口實を設けて墺國に要求し、フレデリック大王は墺國のシレジア全部を得んことを求めたれども容れられざりしかば大王は此に父祖傳來の訓練を受けたる精兵を率ゐてシレジア州に侵入したり、此に於てか墺地利王位繼承の亂起り獨乙諸州を始め英佛等之に干涉したりしが一七四八年エラ、シヤペルの條約に依りて戦争局を結びシレジアは Aix-la-Chapelle

七年戦争

大王大に  
敵軍を破  
る

遂に普國領に歸し、マリア、テレサは王位に登りぬ、墺國女王マリア、テレサはシレジア州を恢復せんを欲し魯帝エリザベスと同盟し、佛國、サクソニイ等の諸國を誘ひ、以て普國の勢を挫かんことを圖れり、世に七年戦争と稱する者此に起れり、フレデリック大王は四面敵を受け單に英國より援助を得たるのみなりき、されば普國の興亡を一身に擔へる大王の苦心經營察するに餘りありて勝敗の數交々至りて事容易に決せざりしが、大王非凡の勇氣と其兵略に長せるは遂に其効を奏し、ロスバハ、ロイテン、ツェルンドルフ等の諸戦に大に敵軍を破るを得たり、其後魯墺連合軍の爲めにキェネルスドルフに大敗し、一時前途の望を失したりしも幸に再び勢を恢復したり、偶々一七六〇年魯帝殂してピ



同盟諸國  
分離す

ーター三世位に即き、フレデリック大王に與せしかば同盟諸國忽ち分離して形勢爲めに一變し、大王は此機に乗じて大に奥軍を破り、奥國は遂に普國とヒュベルツブルグに和を媾するの止むを得ざるに至れり、此條約に因りて普國は奥國よりシレシヤ州を得、列強諸國の抵抗を排くるの實を擧げて終に歐州中部に雄視するの一強國となれり、

ヒュベル  
ツブルグ  
の和議

Hiibersburg

Silesia

第十四章 魯國とポーランド及シベリア、

ポーラン  
ドの建國

ポーランドは十世紀の頃より獨乙の東部に國を立て、中世時代に隣邦の魯人及獨乙騎士等の侵寇を排けて漸次國力を増長し、リヌアニア州を併するに至りて疆域大に張れり、  
Poltania  
Lithania  
Pieratar大帝の當時はスウェーデン、デンマルク等の強國と相

Sweden

Denmark

魯帝カサ  
リン二世

並び、北方大戦争には魯國と同盟してスウェーデンを討し、純然たる一王國を爲せり、然るにPieratar大帝以來魯國が攻略を事として頻りに領土の擴張を務むるに至り、ポーランドも自ら其術中に陥るに至れり、

魯帝カサリン二世は果斷の資に富める女帝にして四方の

Catherine II.

經略に意を注ぎ、偶々ポーランド王オウガスタス三世の殂

Augustus III

するや直に其王位繼承に干涉し、遂に女帝の寵臣ポニアト

Poniatowski

ウスキをポーランド王に撰舉せしめたり、從來ポーランド

ポーラン  
ド魯國の  
干渉する  
所とある

はカソリック教(羅馬)を奉するの國なるを以て貴族等は希臘

Catholic

教を奉する新王を戴くを肯んせずして叛を謀りしかば魯帝は兵を出して直に之を鎮定したり、此の如きの事情なるを以て當時ポーランドは國內の統一無く庶民の窮乏頗る



ポーランドの分割

ポーランド王國滅亡ス

魯國のシベリア侵略

甚しきものあり。雖も魯帝は之が改進の方策を講せず、却て其無道の増長せんことを欲し、以て之を魯國に併せんことを志したり。然れども普墺の二國を憚かりて容易に手を下さず。徐ろに時機の到るを待ちたりしが、一七七二年遂に普墺兩國を誘ふてポーランド王國の第一回分割を始めて三國各領地を蠶食し、一七九三年第二回分割起り、一七九五年第三回分割始まり、ワルソワの舊都陷る。と共にポーランド王國は全く滅亡し、<sup>Warsaw</sup> 宏大なる其領土は魯墺普の三國に分轄せらるゝに至りぬ。

翻て魯國の東方侵略を察するに、其初め遠くイワン四世の時に在り、イワン四世は當時南魯に住せる慄悍にして、掠奪を事こせるコスサック族を用ゐて、大に東方シベリアの侵略

Cossacks

Siberia

Ivan IV

魯人滿州に侵入す

魯人滿州以北に確乎たる根據を設く

ピーター大帝清朝と境界を議定す

に従はしむ。爾來コスサック族はシベリアの諸蠻民を征服して漸次に東方に進み、十七世紀の初めには既にオコツク海に達し、<sup>Kamchatka</sup> カムチャッカの地をも蹈めり。尋て黒龍江附近を探検して諸處に城壁を築き、遂に清領滿州に侵入したり。此に於てか清魯の間に屢々衝突を來したりしが、當時清朝は創業の際にして南方の經營に汲々とし、力を北方の防備に注ぐの餘裕無かりしかば、魯人は遂に滿州以北に確乎たる根據を設くるに至り、

ピーター大帝魯國の基礎を固むるに共に外征に力を用ゐる。シベリアを平定せんと欲し、一六八九年大使<sup>Gorovin</sup> ゴロヴィンを清朝に遣はし、境界を確定せんことを以てす。清廷乃ち索額圖<sup>Nevinsk</sup> を大使として、派遣し、魯の大使<sup>Nevinsk</sup> ネルキンスク(尼布楚)に會



して議せしむ、此時ゴロウソク一步を譲りて尼布楚條約を結び、外興安嶺以南の地は悉く清領たるべきを定めたり、爾來シベリア一圓の地は全く魯國に屬し、ピーターの後歴世外交に意を用るしかばシベリアの施政も自ら整頓するに至りぬ、

第十五章 北米殖民地の獨立

北米に於ける英佛殖民地の衝突

十八世紀の初め北米にては英佛の兩殖民各其威を振ひ互に相軋するの傾きあり、佛國殖民は英殖民地に侵入して大西洋沿岸に逼らんことし、之に對して英殖民地に於ては一七四八年オハヨー會社を組織して頻りに佛領に衝れり、然るに一七六三年ハリ條約の結果に依り佛國がカナダ、ノワ

Canada

英國遂に北米の牛耳を握る

米國殖民の繁昌大に英國の商工業を振はす

印紙條令

スコチア、ルイジアナ等の諸領を英國に割讓するに至りしより英國は遂に北米殖民地の牛耳を握るに至れり、北米殖民地の國民繁殖するに従て英國より輸入せる需要品著しく増加しければ英國は英米兩國の特約を結ひて外國の輸入品を妨げるの方針を執り爲めに英國の商工業は非常の發達を遂けたり然るにかの七年戦争に普國の急を救ひたる以來英國の國債俄かに膨脹し政府は北米殖民地に賦課して之を償ふの止むを得ざるに至れり、一七六五年英國々會は印紙條令を通過して北米殖民地の法律文書、新聞雜誌に課税することを定めたり、此事たる大に殖民地の憤怒を招き、マサチューセツ及びヴァージニアの二州殊に激昂し、慷慨の志士パトリック、ヘンリーは此條令の廢止を主張

Massachusetts

Virginia

Patrick Henry



北米殖民  
印紙條令  
の廢止を  
迫る

し英國は殖民地に課税するの權あるや否やを論駁したり、  
此に於て北米の殖民地九州は同年<sup>New York</sup> ニュー・ヨルクに會合し  
て英國は殖民地に課税するの權無きを議決し、英國に向て  
印紙條令の廢止を要求したり、英國々會に於てもかのピット  
の如き熾に北米の要求の理あるを主張しければ印紙條令  
は遂に廢止せられたり、

英國再び  
茶税を課  
す

爾來英米の關係稍々複雑を來せしが英國が前非を鑑みず  
して一七七〇年再び米國に茶税を賦課するの策を執りた  
るは遂に彼我の紛擾を増長せしめたり、米國人心の激昂せ  
る折しも一七七三年英國の商船茶を投載して<sup>Boston</sup> ボストン港  
に投錨せしかば血氣の府民數十人船中に闖入して貨物を  
悉く海中に投し大に狼籍を極む、此報英國に達するや國會

ボストン  
事件

フェラデ  
ルフィア  
の大會

獨立戰爭  
の發端

は直にボストン議案を可決してボストン港を封鎖し、且つ  
罪人を法廷に召喚せんことを議決し、英兵指揮官<sup>Gage</sup> ゲージ將  
軍に全權を委任してマスサチューセツの太守に任命したり、  
然るに米國の諸州は一七七四年<sup>Philadelphia</sup> フェラデルフィアに大會を開  
きて事の是非曲直を英王並に英國國民に辨白し、事若し成ら  
ずんば斷して英國との交易を杜絶すべきを決したり、翌年  
マスサチューセツ州の立法官は<sup>Concord</sup> ゲージ將軍の許可を得ずし  
て<sup>Concord</sup> コンコルドに會議を催ふせしかば<sup>Lexington</sup> ゲージ將軍は兵力を  
以て之を妨げ此に英、米の衝突を來し、<sup>Lexington</sup> レキシントン附近に  
於て両者の交戦起れり、之を米國獨立戰爭の始めとす  
米國は更に大會を<sup>George Washington</sup> フラデルフォアに開きて國家の急を議し  
全州一致を以て米軍の指揮を<sup>George Washington</sup> シルシ、ワシントンに托した



フシント  
ン指揮官  
となる

獨立の宣  
言

佛國米國  
に賛意を  
表す

佛國公然  
米國と同  
盟す

り、彼が勇敢にして愛國の赤誠に富み、果斷にして統御の才を備へたるは忽ち其非凡の將帥たるを天下に現はしたり、一七七六年當時殖民地を組成したる十三州は獨立の宣言書に調印して同年七月四日之を世界に宣言したり、かの學績人物を以て當時夙に其名歐洲までも轟けるフランクリンは大使として佛國に赴き以て賛助を求めたり、折しも佛國は社會民權の思想著しく發達して稍々君主政を厭ふの傾きありしかば深く米國の處置に賛意を表し、ラフ、エツト、ロシヤムボトの如きは自ら佛國の志士を募りて米軍に従事し大に盡す處ありき、一七七七年佛將ブルゴイン六千の兵を以てサラトガに英軍の虜となるや佛國は大に感して公然米國と攻守同盟を結ひたり、爾來戰爭改まりてワシントン

Saratoga

Burgoyne

Lafayette

Franklin

英國遂に  
米國の獨  
立を認め

北米合衆  
國の新  
憲法

トンを始め諸將頗る苦戦し互に勝敗ありしか一七八一年米佛聯合軍が英將クリントンの軍をヨルク、タウンに破るや英軍は頓に其勢を消沈し翌年和蘭、スウデン、デンマルク、西班牙、魯西亞の諸國は皆米國の獨立を承認し、尋て一七八三年英國も終に其勝算無きを察して佛國ウエルサイユに和議を締結し以て米國十三州の獨立を認可したり、北米合衆國の獨立此時に成りぬ、今や北米合衆國は新たに憲法の必要を生じ一七八七年フ、ラデルフ、アに大會を開きワシントン之が議長となりて新憲法を制定したり、此に因て北米合衆國は共和政体を保ち大統領之を主宰し、元老院及び衆議院より成れる國會ありて國事を議定し大統領は各州に因て互に撰舉することこ

Clinton

York Town

Versaille



なれり、一七八九年ワシントンは全州に推されて合衆國の  
第一代大統領となり、一七九一年政治の中心點として新國  
都ワシントン府の創設を見るに至りぬ、  
Washington

第十六章 佛國革命の發端

ルイ十四  
世時代の  
佛國

曩に佛王ルイ十四世が佛國の膨大を圖るに汲々として、頻  
りに王權を擴張するや下庶民の境遇日に非運に陥るに至  
りぬ、蓋し社會の階級自ら貴族、僧侶、平民の三者に分れ、貴族、  
僧侶は特權を弄して佛國領土の三分の二を領し、國家の義  
務は舉て之を平民に負擔せしめられたればなり、さればルイ十  
四世の代佛國の壯觀を外國に誇らんが爲めに要したる幾  
多の經費は、國庫の不足を告げて勢ひ庶民に其責を負はし

庶民の困  
難

ルイ十五  
世暗愚に  
して佛國  
日に非運  
に傾く

むるに至りたれば庶民一般の窮乏に迫りたるは推して知  
るべし、此弊政爾來相續きて毫も革まる所無く、王權は次第  
に專制に傾き庶民の情態益々非なり、ルイ十五世王位に登  
りて暗愚世事に通せず、從て奸臣其隙に乗じて權を肆にし  
爲めに佛國宮廷の紊亂甚しく國庫の窮乏は其底止する所  
を知らざるに至りぬ、  
Louis XV

十八世紀  
末葉に於  
ける歐洲  
の思潮

此時に當り歐洲の思潮著しく勃興して大に學藝技術の進  
歩を促かし、新事物の發見發明は人民をして新進の氣象を  
高めしめ、特に政治社會に就ての時論列る處に新奇の學說  
を擴げ、佛國に於ては當時幾多の名士輩出して皆時勢に應  
じて意見を公にし、中にもモンテスキューの自由論、ヴォル  
テアの民權論、ルソーの王權論は卓見衆に擢て、大に佛國  
Rousseau  
Montesquieu  
Voltaire



米國の獨立大に民心を獎勵す

ルイ十六世

財政の刷新を奏せず

の人心に感動を與へたり、加ふるに遙かに米國の異域に於て新進の氣象其効を奏して合衆國の獨立となり、貴賤尊卑の別無く均しく民權を娛むの實を擧げたるは非境に沉淪せる佛國の民心に影響を及ぼせること尠からず、

一七七四年ルイ十六世位に即く、王寛大の資に富みしと雖も時勢に切要なる果斷の才に乏しく、墺國の皇女 Marie Antoinette シトアネットを娶りて皇后とす、王即位の初め財政の紊亂甚しきを察して之を矯正せんご欲し、*Turgot* 及び *Necker* の如き敏腕の實業家を擧げて財政の刷新を謀らんごしたれども貴族、僧侶の妨くる所となりて遂に果さずして職を去る、後ちに至りネツカー再ひ召されて職に就くや、今や英斷以て事を處するの急なるを察し、王に勸めて國會を召集

佛國々會

平民と貴族、僧侶の軋轢

國民議會

せしめたり、國政の紊亂に伴ふて百七十餘年間曾て開會の運に至らざる佛國々會は一七八九年五月ウルサイユに開かれ貴族、僧侶、平民の三階級を併せ千二百人の議員列席したり、是れ抑も佛國革命の發端とはなりぬ、

議會の開かるゝや投票の件に就き忽ち貴族僧侶と平民との軋轢を來し、平民議員は斷然分離して國民議會を組織し以て國家の大事を議せんことを決したり、爾來佛國の内情紛々として紊れ、三回の議會を経て國內遂に無政府の有様に陥るに至れり、

(一)國民議會(一七八九—一七九二)  
National Assembly

國民議會は佛國の新憲法を制定するの目的を以て集まりしにルイ十六世は之を解散せんが爲めに兵をパリ附近



國民議會  
新憲法を  
制定す

に集めしかばパリの府民大に怒りて一揆を起しバスナルの獄を破壊したり、此報を聞き各地の農民一時に蜂起して貴族に衝りしかば貴族は多く難を國外に避けたり、此に於て一七九一年國民議會は憲法を制定し王に逼りて其批准を得たり、此憲法は立憲王政を組織し、貴族僧侶の權勢を抑へ、税法を改良し以て王權の濫用を防きたり、然るに王新憲法の發布を躊躇せしかばパリ府民激昂の餘りウルサイエユ宮殿に迫りて王を促かして遂にパリに還らしむ、國民議會も此に於てか議場をパリに移しぬ、

立法議會

(二)立法議會レジュブレマン・ナショナル  
Legislative Assembly 一七九一—一七九二

立法議會は國民議會の後を承けて集まり主に中等社會の青年より成る、此頃革命黨の中には既に幾多の黨派を生じ

立法議會  
の黨派

シロンヂ  
スト黨勝  
を制して  
外國と戦  
を開く

列國同盟  
して佛國  
王を救は  
んとす

就中シヤコピン黨Jacobin、コルデリエル黨Cordelier、ファイラン黨Fouillant最も勢力あり、立法議會の議員に三黨あり、一は立憲王政主義を有し、一はシロンヂスト黨Girondistと稱し温和なる共和主義を懷き、一はマウンテン黨Mountainとしてシヤコピン、コルデリエル黨の領袖等も之に屬し過激なる共和主義を有せり、三黨互に議容れざりしがシロンヂスト黨遂に勝を制して内閣を組織し、更に國民の志氣を鼓舞せんと欲し王に逼りて外國との交戦を促かし遂に奥國と開戦するに至れり、時の普王Frederick Williamウリアム二世は佛國の情態日に非なるを目撃し、奥帝Leopold II, Plintzレオポルド二世は佛國の情態日に非なるを誓へり、此報に接し佛王ルイ十六世はシロンヂスト内閣を散解し、代ゆ



るに王黨を以てせしかばパリの暴民<sup>Tuileries</sup>ヲユイレリイ王宮に  
亂入し爲めに王は難を議會に避けたり此に於て議會は王  
權の中止を議決し王及ひ其一族を<sup>Temple</sup>テムプル城に幽閉した  
り

國民集會

(三)國民集會<sup>ナショナル・コンヴェンション</sup> (一七九二—一七九五)  
National Convention

立法議會は今や一變して國民集會となり全然共和黨の議  
員より成り開會するや否や直に王政の廢止を議決し共和  
政治を宣言したり此會に於ては初めシロンド派最も  
勢力を有したりしが後にジャコピン黨大に跋扈しロベス  
ピア、ダントン、マラー、クーシヨ、等之が首領となりてパリ

暴民の後援を得て激烈なる共和主義の實行を圖り遂に佛  
王ルイ十六世を議會に召喚して其罪を斷して死刑を宣告  
す  
共和主義  
大に跋扈  
す  
ルイ十六  
世を死刑  
に處す

し一七九三年一月二十一日王を斷頭臺上に登しぬ

第十七章 佛國の恐怖時代とナポレオンの勃興

列國同盟  
して佛國  
に衝る

ルイ十六世の弑せらるゝや歐洲列國の同盟を來して佛國  
に抵抗せしめ英國率先して軍を起し列國の兵と聯合して  
佛國の境に迫れりシロンド派の佛將<sup>Dumouriez</sup>デュモリエーが境

外に敗れて軍を退けしは國民集會に於けるシロンド派  
黨の勢力を一掃してジャコピン黨に移るに至らしめたり

保安議會

一七九三年四月ジャコピン黨は保安議會<sup>コンテラ・パブリック・セーフティ</sup>を組織しダント  
ンロベスピエール之が首領となりて熾んにシロンド派

をパリの内外に殺戮し國民集會の全權を握りて頗る過激  
の方策を執れり然れども内には王黨幼王ルイ十七世を奉  
Louis XVII



佛軍大に  
聯合軍を  
破る

して亂を起し、外には聯合軍の攻め來るありて内憂外患一時に到りしがシヤコビン黨の策略以て王黨の亂を鎮し、又佛將カルノー、Jordan シュルダンの二人はバリの内外に列國の聯合軍を破りて之を退けたり、此時コルシカ島の一士官ナポレオンは神妙の謀を廻して敵軍を走らし夙に其凡將に非らざるの實を擧げたり、

恐怖時代

今や保安議會は佛國の全權を握りて峻嚴なる共和主義を勵行し、苟も保安議會の處置に鎖少の敵意を表するものは老幼男女の別無く悉く之を捕へて死刑に處し、全國の虐殺其數を知らず到る處血流れて河を成すに至りしと云ふ世に之を恐怖時代と稱す、新曆を發布し、耶蘇教寺院を破壊して道理信仰を唱へ、風俗習慣等悉く舊來の制を廢し、百般の

ロベスピ  
ア殺さ  
る  
恐怖時代  
消失す

事物皆革新の制を執れり、然るに革命運動其極に達するに共にシヤコビン黨内自ら不和を生じダントンは稍々温和主義に傾きロベスピアは依然過激主義を唱へ互に相容れざりしがロベスピア黨遂に勝を制してダントン黨を捕へて悉く之を殺せり、爾來ロベスピア獨り專權を弄したりしに黨員之を憎む者漸く増加し、ロベスピアも又遂に革命黨の及に斃れたり、恐怖時代此に於て自ら消滅した

新憲法成  
る  
佛國三軍  
を整ふ

保安議會の温和黨は今や新憲法を制定して保安議會を解散し、上下兩院より成る立法部と五人の監督官を擧げて國事を委任したり、新政府は直に三軍を整へて英、露、奥の三國同盟に衝れり、第一軍はシュルダン將軍之を指揮してモイゼ



ナポレオン大に敵軍を破る

カムボ、  
フォルミ  
オの條約

ナポレオン  
の埃及  
征伐

河に向ひ、第二軍はモリユー<sup>Moreau</sup>之を率ひて獨乙に進み、第三軍はナポレオン之を令して伊太利に向ひたり、モリユー及びシヨルダンの二將は塙軍の撃退する所となりしが獨りナポレオンは伊太利に屯せる塙軍を悉く破り其神妙の謀は大に列國の注目する所となり、更に進んで塙都<sup>Venna</sup>ヴヱンナに向はんことしたりしが塙國は遂に其勝算無きを察し一七九七年十月カムボ、フォルミオに和議を締結したり、之に因て佛國は塙國のベルジユム及び北部伊太利に有せる領地を得たり、  
ナポレオンは今や一打撃を英國に加へんことを欲し埃及を征して英國と印度との交通を遮るの計畫を監督廳に建議したりしかば折しも漸くナポレオンの威名を嫉める監督廳

アブーカ  
の海戦

列國第二  
同盟軍を  
組織す

ナポレオ  
ンの歸國

は直に之を許せり、此に於て一七九八年ナポレオンは艦隊を指揮してツローン港を發し埃及に直進したり、然るに同年八月アブーカ<sup>Toulon</sup>の海戦に於て佛國艦隊は英將ネルソン<sup>Nelson</sup>の爲めに撃沈せられ、ナポレオンは本國との海路を杜絶せられたり、ナポレオン此に於てシリアを征しトルコを衝かんと圖りエーケル城を圍みたれども敵の防く所となりて果さずして兵を埃及に旋せり、  
此時に際し歐洲列國は第二同盟軍を組織して佛國に對抗し、到る處に佛軍を破りて諸國に侵入せる佛兵を悉く撃退せり、之が爲めに監督廳は甚く民望を失し國內不穩の狀を呈せるに當てナポレオン突然埃及より歸國せしかば國民率先して之を迎へ、パリの守備兵又之に應じたり、一七九九



ナポレオン非常政策を断行す

年ナポレオンは非常政策を執行して監督廳を廢し、五百人議會を解散して新たに執政官の職を設け三人の定員を置き自ら第一執政官となりぬ、斯くて立法院、參政院、元老院等を設けて立法、行政の機關となし、地方制度を改め、税法を定むる等着々政治の鞏固を圖りたりしが此時國家の實權は既にナポレオン一人の專有する所となり、政府の樞機は一に皆其意を迎ふるに過ぎざるの有様となりぬ、

マレンゴの大戦

一八〇〇年ナポレオンは自ら大軍を整へて伊太利に進みモリユーは獨乙方面に向へり、同年六月マレンゴの大戦に於てナポレオンは塹將メラスの軍を殲し、尋てモリユーはホーヘンリンデンの野に塹軍を破りて大勝を得、翌年塹國は遂にルネヴルに和を講じ、ベルジユムの塹領を佛國に割

アミアンの條約

ナポレオンの改革

讓し、伊太利の諸邦又概ね佛國の保護を仰ぐに至れり、今や普魯兩國は中立を宣言し、同盟軍中佛國に敵するは獨り英國のみなりしに英國は折しもアイルランド合併問題に關して國內多事、爲めに内閣の更迭を來せし程あれば畢竟外戦に全力を注ぐの餘裕無く遂に一八〇二年アミアンに佛國と和を結びて佛國の占領地を認定したり、  
外患の全く平くるやナポレオンは意を國內の改革に用ゐ、賢明の士を擧げて革命以來一掃せられたる舊慣を恢復し、司法の制を改め今日歐洲諸國が採て模範とせるナポレオン法典なる者を制定し、羅馬法王と好を結びて耶蘇教寺院を復興し以て國民を安堵せしめ、又教育制度を完成し、商工殖民の策を獎勵し、海陸の防備を嚴にする等着々として佛



ナポレオン終身執政官となる

ナポレオン皇帝とある

國の進歩を圖れり、斯くて久しき革命の争亂に因て疲弊したる佛國の實力も漸次に舊に復し、之と共にナポレオンは全國民の衆望を一身に集中し、從來十年間の執政官たりし者今や國民に推されて終身執政官となり、パリ府の壯觀を營むと共に自邸の壯麗華美を盡せるの狀恰も王公の宮殿に異ならず、以て當時ナポレオンの威望察するに餘りあり、爲めに之を嫉む者往々出て、ナポレオンの生命を伺ふに至る者ありしが、ナポレオン之に激昂して好機乘すべしと爲し、遂に元老院を以て皇帝の稱號を奉らしめ、ノートル、ダームの寺院に盛大なる即位式を舉行したり、實に一八〇四年十二月二日にして佛國共和政治此に一變して帝國となりぬ、

第十八章 佛帝國と歐州列國

第三同盟軍

トラファルガルの海戦

ナポレオンの未だ執政官たるの時に當て佛國の威を振て諸國に干涉せしかば、英國は之を以てナポレオンの非望に出るこなし、アミアン條約を無効としたり、此に於てか英佛の間戰端將さに起らんこしたりしが、偶々ナポレオンが帝號を唱へ、即位の後功臣に授くるに元帥Marshalの榮爵を以てし、自ら伊太利王冠を戴きて宮廷の威嚴壯麗を極むるや、列國の諸王は之を肯んぜず、英國率先して列國を誘ひ、第三同盟軍を組織して佛國に抗し始めたり、ナポレオンは大軍を引率して獨乙方面に向ひ、又海軍を英國に派遣したり、一八〇五年十月トラファルガルの海戦に於



ネルソン  
戦没す

ナポレオ  
ン大に魯  
埃の軍を  
破る

プレスブ  
ルグの條  
約

ライオン  
同盟成る

て佛國艦隊は英將ネルソンの破る所となり、ネルソン此時  
 戦没したり。雖も爾來佛國の海軍は全く其勢を失ふに至  
 りぬ。然れども陸に於てはナポレオン到る處に大勝を博し  
 一八〇五年十月ウラムの大戦に埃將マックを破り進んで埃  
 都ヴェンナを陥れ、同年十二月アウステルリツの大戦に魯  
 帝アレキサンダーの率ゐたる埃魯の聯合軍を破り、埃帝フ  
 Alexander  
 ランシスはプレスブルグに和を講じてナポレオンの帝號  
 Francis Pressburg  
 を承認し且つ伊太利の埃領を佛國に讓與したり。  
 ナポレオンの勢此の如きを以て列國は稍々佛國に與みす  
 るの傾きを呈し伊太利ネーブルス王廢せられてナポレオ  
 Napolis  
 ンの弟ジョゼフ代りて王となるや同時に獨乙帝國の西南に  
 Joseph  
 位する十四州は帝國を脱してライオン同盟を組織し、以てナ  
 Rhine

神聖羅馬  
帝國滅ぶ

普國戰を  
佛國に宣  
言す

大陸制度

ポレオンの保護を仰ぐに至り、之が爲めに獨乙帝國は瓦解  
 し獨帝フランスは帝位を辭して埃帝フランスと稱し、  
 千有餘年繼續したる神聖羅馬帝國は此歲一八〇六を以て  
 滅亡せり、尋て和蘭はナポレオンの弟ルイを迎へて王と爲  
 Louis  
 し、普國も又稍々佛國に與みするの傾きありしにナポレオ  
 ンの舉動普國を輕侮せるを憤り、有名の詩人アルントの如  
 Arndt  
 き慷慨の詩を作りて頻りに國民の敵愾心を鼓舞せしかば  
 普王ウリアム三世は國力の疲弊せるをも顧みず、遂に佛國  
 William III.  
 に戰を宣言したり、然れども到底佛軍に抗するの實無く、一  
 八〇六年アウエルスタット及びエナの二大戦に普軍大敗し  
 Auerstadt Jena  
 てナポレオンは直にベルリンに進みベルリン令として大  
 陸制度なる者を發布し、大陸と英國との交易を禁じ、以て英



ナルシツト條約

ナポレオン西、葡、兩國を征す

國に一打撃を加へんことを謀れり、時に魯國は普國を救はんご欲し兵を出して佛軍に衝りしに一八〇七年フリードランドの戰に魯軍大敗し、遂に普魯兩國は同年七月ナルシツトに佛國と和を媾し、之が爲めに普國は領土の半を失ひ、ウエストフリアの新王國此時に成りてナポレオンの弟ゼロム、*Westphalia* ボナパルト之が王となれり、*Bonaparte* 偶々當時西方の西班牙、葡萄牙の兩國が内訌の爲めに國勢振はざるに乗じてナポレオンは兵を出して之を征し、兩國王を追放したり、然るに兩國、民之を肯んぜずして必死の抵抗を試みしかば列國之に同情を表し、英國の大將ウリントン *Wellington* ン西班牙半島に上陸して佛軍を撃退したりしにナポレオン自ら大軍を以て之を征するに至りて再び佛國に服しぬ、

奥國との交戦

魯國征伐

恰も普國の兩國に於て此時愛國の情大に勃興し、佛國の西班牙遠征の隙に乗じて奥國兵を擧げて佛國に抗せんことを謀りしかばナポレオンは急に兵を旋じて奥國に向ひ、一八〇九年ワグラムの大戰に奥軍を破りてヴェンナに和を結びて莫大の領土を得且つ奥國の皇女マリア、ルイサを娶りて皇后とせり、*Wagram* *Maria Louisa* 今や歐洲列國概ねナポレオンの威命に服し、獨り東方魯國は依然として佛國に對峙せり、此に於てナポレオン之を服せんご欲し、一八一二年魯國が大陸制度を守らざるを名として大軍を率ひて之を征す、魯人は佛軍に敵し難きを知りて深く内地に退陣し、佛兵のモスコウ府に達するや魯人火を放ちて全府を悉く灰燼に歸せしめたり、佛軍此に於てか *Moscow*



佛軍大敗す

爲す所を知らず糧食盡きて身を容るゝに處無く遂に止む無く退軍に決じたり、然るに折しも魯國の嚴冬迫り來りて佛軍の過半爲めに凍死し之に乗じて魯兵は到る處に出沒して之を討せしかば佛軍は散々に敗れナポレオン僅に身を脱してパリに歸れり、

列國更に同盟して佛國に抗す

ナポレオンの魯國遠征の大失策は列國の敵愾心を鼓舞し、普國率先して兵を挙げ、英、魯の諸國と同盟して佛國を討す、英將ウリントンシは西班牙方面より近く佛國の南部に攻め寄せ、普、魯の兩軍は東方より兵を進めたり、ナポレオンは再ひ大軍を募りて獨乙方面に向ひリュツナエン及ヒパウケンの兩戰に普、魯の聯合軍を破りたれども、此時墺國も同盟に入し、ウリントンの軍と東西相應して佛兵に衝りしかば一

ナポレオン大敗す

ナポレオン遂にエールバ嶋に流さる

ルイ十八世位に登る

八一三年十月ナポレオンは遂にライプシツクに大敗したり、同盟軍直に大舉して佛國に迫り翌年遂にパリ城市を陥れたり、ナポレオン百方策を廻らして之を防きたれども遂に敵を退くること能はず、此報に接しライン同盟は佛國の保護を脱し、和蘭は叛旗を翻し、ナポレオンは謀盡きて遂に皇帝の職を辭し、同盟軍の命に依りてエールバ嶋に流竄せらるゝに至りぬ、

第十九章 ナポレオンの再興とヴヱンナ會議

一八一四年五月同盟諸國はパリ條約を締結してルイ十六世の弟ルイ十八世を王位に即かしめ佛國の境域を革命前の當時に復舊せしめたり、ルイ十八世は立憲王政を發布し



王朝恢復  
は其効無  
し

ナポレオ  
ン、エル  
バ嶋を脱  
す

ナポレオ  
ン帝國を  
再興す

ヅネン  
ナ會議

て國民の自由を高め、國會に立法權を附與して政事の革新  
を示せしむ。雖も王の素志は由來君主專制を復興するに在  
りしを以て機に乗じて立憲政治を濫用するの傾きを呈せ  
しは大に民心を損ひ、王政恢復は却て國難を醸すの風あり、  
此時に際し、一八一五年ナポレオンは潜かにエルバ嶋を脱  
して佛國のカンネに上陸したり、此に於て共和黨を始め舊  
來の諸將皆率先して之を迎へしかば大軍立ちに整ひ、ナポ  
レオンは之を率ゐて直にパリに進入し、ルイ十八世を追ふ  
て舊帝國を再興したり、  
折しも列國の使臣は塙都ヅネンナに會合して革命亂後の  
處置に就き議する所ありしが、ナポレオンの再興せるを聞  
き、直に之を歐州の國賊なりと議決し、聯合軍を發して之を

ウオータ  
ーの  
決戦

ナポレオ  
ン、セン  
トヘレナ  
嶋に流さ  
る

ヅネン  
ナ會議

討す、英將ウヰリントン及び獨將ブリュッヘルは軍を合してナ  
ポレオンをベルジユムの野に圍み、一八一五年六月ウオー  
ターに決戦して大にナポレオンの軍を破り、ナポレオ  
ンはパリに逃れ歸れり、此に於て聯合軍は遠くパリに進入  
して再びルイ十八世を立てたり、ナポレオンは帝國を維持  
する僅かに百日にして今や百計盡きて米國に脱走せんこ  
ごを謀りたれども果さずして捕へられ、遂に英船に投して  
セントヘレナの一孤島に流竄せられたり、一代の名傑も絶  
海の孤島に幽せられては又爲すに所無く、一八二一年五月  
ナポレオンは終に嶋内不歸の客とはなりぬ、  
ヅネンナ會議は英、佛、露、普、五ヶ國の大使を主として一八  
一四年の十月より開かれしが議着々其歩を進めて一八一



ヅ井エナ會議の結果

五年六月則ちナポレオン敗北の月を以て全く終了し、此に歐洲の平和復舊せられたり、此會議の結果として普墺兩王國の復興を來し、和蘭共和國はベルジウムと相合してネザーランド王國と爲り、獨乙聯邦及びスヴヱス聯邦の創立を生じ、西班牙其他伊太利諸邦に於ける舊王朝概ね恢復せられ、魯國はワルソウ大公國を得て領土を擴張し、英國は大に殖民地の膨脹を來せり、

第四篇 近世史(紀元一八一五年より現

今に至る)

社會の交通全世界に及びたる時代

第一章 平和恢復後の歐洲列國

ウヰエンナ會議の終了するや歐洲の平和此に恢復せられたり、雖も、列國の諸王は反動的に保守主義の精神を固執し、君主專制の本領たる魯帝アレキサンダーは一八一五年九月二十六日普墺の兩王とパリに會合して神聖同盟なる者を組織したり、其名は道德、宗教に基きて内治外交を整ふるにあり、雖も其實は君主專制主義を保護するの同盟に外ならず、英國及びトルコを除くの外は列國概ね此同盟に加

神聖同盟

Alexander

Paris

神聖同盟  
Holy Alliance



保守主義  
は却て國  
民の革命  
を促かせ  
り

獨乙聯邦  
の狀況

入したり、然れども佛國革命以來自由平等の思想普く歐州の國民に浸染し、加之科學は著しく進歩して空前の諸機械發明は益々國民をして進取の氣象に富ましめ、王公の保守主義は却て列國民革命の動氣を促かしたり、獨乙聯邦はヴェンナ會議に因て再興せられ、聯邦議會は奧國之が主宰となりて立憲代議政体を發布せしむ、雖も列國保守的の反動甚しきが爲めに其實を擧ぐる能はず、加ふるに各邦政治上の統一無きが故に聯邦の名空しく存するの、然れども革命戰爭以來國民愛國の情熾んに勃興し、從て精神的文物即ち哲學思想、歴史思想、詩歌美術等著しく發達したり、之を以て奧國の宰相メッテルニヒ一たび獨乙聯邦の實權を握りて國民自由の思想を制せんことを圖るや、獨乙

ワルトプ  
ルグの騷  
動

カールス  
バードの  
國會

西班牙の  
狀況

大學の學生相結びて事をワルトブルグに擧げ魯帝の密勅を奉して保守主義の擴張に従事せり、この聞へある獨人コッテヒューを殺せり、此に於て一八一九年メッテルニヒは議會をカールスバードに開きて出版の自由を停め、大學の監督を嚴にし、益々自由思想の發展を抑制したれども、國民一般の傾向は到底之を一掃すること能はざりき、特に奧國の領内にはマジャール、伊太利人等異種族住して時勢に煽動せられて自治運動を始め、奧國內に於ける革命的の騷擾は容易に鎮定するの模様無かりき、  
西班牙に於ては前に一八一二年愛國の志士王に逼りて新憲法を制定し國會を設けたりしが、舊王朝の恢復せらるゝと共に再び君主專制に變じ、立憲黨は多く罪せられたり、然



南米の獨立

れども南米に於ける西班牙の屬領は此時一大變遷を來せり、抑も南米殖民地は西班牙に屬せしより殆ど三百年久しく苛政に苦み、國民時運の革新を欲すること切なりしが偶々北米獨立に續て佛國の革命起りて甚く民心を刺激し遂に一八一〇年獨立戰爭を起すに至れり、爾來南米に於ける自由思想は着々其効を奏し、アルゼンチン、ウルグエイ、コロムビア、ペル等の諸州は西班牙の羈絆を脱して共和國となり、一八二九年北米合衆國の承認する所となれり、此機に乗じて一八二〇年西班牙の軍隊叛して事を挙げ、一八一二年の憲法を復興したれども神聖同盟會合の結果に依り佛國より援兵を派遣して王軍を救ひしかば叛亂忽ち鎮定に歸しぬ、又隣邦葡萄牙に於ては革命の當時王ジョン六世が難を

西班牙軍隊叛す

葡國の状況

ブラジルの帝國

伊太利の状況

チーブルスの叛

希臘の獨立

ブラジルの避くるに際して國民は新憲法を制定し、王歸國の後之を嘉納したれども、保守黨は之を肯んせずして王の長子ジョン、ミグエルを奉して事を謀らんごせしに成らず、又王の次子ドム、ペドロは南米ブラジルの王に奉せられて新たに帝國を創設したり、

當時伊太利は小邦割據の状態にして國民均しく政事の革新を切望し、秘密政社を組織して伊太利の獨立を謀らんごせしも北方に於ける墺領の保守主義に壓されて容易に事を舉ぐるに能はず、唯たネーブルスの軍人西班牙の叛に倣ひて事を挙げたれども、普墺、魯三國の干涉に因りて忽ち鎮定したり、

獨り自由愛國の思想が全然其効を奏したるは希臘なりき、



當時トルコ帝國の状態は内憂外患引續き、内には近衛兵の國政を紊亂せるあり、外にはセルビアの一州叛して自治制を設け、又各地の太守は殆ど獨立して國運日に衰ふ、此機に乗して希臘人は革命の風潮に伴ふて昔時を追想するの餘り秘密政社を組織して一八二〇年獨立の叛旗を翻して新憲法を宣言したり、歐洲列國は此報に接して大に同情を表し、英國の詩人バイロンの如きは自ら希臘軍に投して戦没したり、特に魯國は宗教を同くするの故を以て銳意希臘の叛亂を援けたり、

トルコ、希臘を討す

トルコは直に兵を發して海陸より希臘を攻めたれども希臘人の抵抗頗る強くして容易に敗れず、トルコ即ち援を埃及の太守に請ふ、埃及の太守乃ち其子イブラヒム、パシヤを Ibrahim Pasha

英、佛、魯の干渉

遣はして希臘を攻め、大に希臘人を虐待したり、此に於て英佛魯の三國はロンドン會議を開きて希臘を救ふことを決し、直に希臘國民保護を名として海軍を希臘に派遣し、一八二七年十月ナワリノに於て聯合艦隊はトルコ艦隊を撃沈し、トルコ軍は爲めに希臘より退陣したり、其後幾何も無くトルコが魯國と戦端を開き連戦連敗して一八二九年アドリアノブルに和を講ずるや希臘の獨立は愈々其承認する所となれり、翌年列國ロンドン會議の結果として一八三二年獨乙バウリア州の皇子オットー希臘の王冠を戴き、此に希臘新王國を創設したり、

希臘の獨立承認せらるる  
新王國

第二章 佛國七月革命と其餘波



立憲保守  
兩黨の争

一八二四年佛王ルイ十八世歿して皇弟ナヤールレス十世位  
 を繼ぐ、王迷心強くして時勢に暗く、君主專制に拘泥して自  
 由思想の國內に普及せるを知らず、立憲内閣を廢して代ゆ  
 るに保守内閣を以てせしかばギゾー、ナヤール、コンスタント、  
 等立憲黨の名士は大に之に反抗し、言論の自由に托して熾  
 んに之を駁撃したり、此に於て王は一八三〇年セント、クラ  
 ウドの勅令を發して國會を解散し出版の自由を制限せし  
 かはバリの府民大に激昂して一揆を起し、遂に王を國外に  
 追放したり、國會は即ち憲法を改正して王權を抑制し、王の  
 一族なるルイ、フィリップを立て、佛王となせり、世に之を七  
 月革命と稱す、  
 Louis Philippe

七月革命

佛國の新革命は忽ち餘波を列國に及ぼし、ウエーナ會議に

ベルジユ  
ム分離す

依りて興りたるネザールランド王國に於てベルジユム率先  
 して運動を始めたり、抑も和蘭とベルジユムの二國は宗教  
 を異にし國民の氣象又相反す、兩國到底一致するの望み無  
 かりしに果せる哉、一八三〇年十月ベルジユムのブラッセ  
 ル府に於て革命起り、ベルジユムの獨立を宣言したり、翌年  
 列國ロンドンに會してベルジユムの獨立を承認したれど  
 も和蘭は之を肯んせずしてベルジユムと交戦すること數

ベルジユ  
ム獨立す

ポーラン  
ドの叛

年、一八三九年に至りて漸くロンドン會議を承認したり、尋  
 て魯領ポーランドは苛政に苦むの餘り叛旗を翻したれど  
 も忽ち鎮定に歸しぬ、  
 Poland  
 獨乙聯邦の諸國は七月革命の影響を受けて概ね立憲政体  
 に改まり、當時獨乙種族大統一の理想國內に漲るに乗じて



關稅同盟

普國は一八三三年聯邦諸州と關稅同盟カスティーユ、ユネオンを結び、以て國民の理想を満たさんこせり、墺國は領内に異種族を有するを以て此同盟に加入するを得ざりしが爲めに漸く普國の潛越を憎むに至れり、然れども當時墺國はハンガリー國會の領袖Kossuthも革命起り、愛國の志士Mazzini諸州を煽動して秘密政社を組織し、遂に一揆を起して、伊太利の獨立を圖らんこせしかば之を鎮定せざる可らずして、墺國は普國に反抗するの餘裕無かりき、

スヴヰスの變遷

又スヴヰスの聯邦共和國に於ては保守改進の二黨起り、宗教上に關して争を來し、一八四五年改進派の七州は聯邦を脱して特別同盟ソントラントを組織し他の諸州と干戈を交ゆるに至りし

Sonderbund

英國の改革

が七州の同盟軍全く敗れて、スヴヰスは新憲法を制定して聯合共和國となり、聯合議會をベルン府Berneに開くこととなりぬ、獨り英國に於ては政事の改革徐々こして進み、ナポレオン戦争以來の國債も漸次に減少し、ハスキソン内閣の時に自由貿易の政策を執り、從來國禁たりし舊教はアイルランドHuskisson Irelandの志士オ、コンネルの盡力に依りてワリントンの保守内閣の時に解放せられ、ヴリアム四世William IV Wellington（一八三七）の代に議會改革の問題喧しく、爲めにウリントン内閣の更迭となり、グレイ新Greyたに内閣を組織し議員撰舉資格改正案を議會に提出したりしに保守黨並に上院は甚く之に反對せしかと一八三二年遂に上下兩院を通過して法律となれり、尋て翌年殖民地に於ける奴隸制度全廢せられ又同年東印度商會の特權を



グヰクト  
リア女王  
位に即く

廢して東洋貿易の自由を許し、貧民保護法、市府の自治制等  
相續て制定せられたり、然れども貧民社會の不平は猶ほ甚  
しく一八三九年憲法改正を名として急激の運動を始めた  
れども政府の監督嚴にして社會の秩序を紊すこと能はざ  
りき、一八三七年ウリアム四世歿してヰクトリア女王位に  
即く其後一八四六年に至り一八一五年以來穀物の輸入に  
苛税を賦課したる穀物條令はコブデン、ブライイト等の盡力  
に因りて廢せられ、自由貿易は益々盛あるに至れり、

第三章 佛國の二月革命

ルイ、フ  
リップに  
對する陰  
謀

佛王ルイ、フリップは内民心を収攬し、外列國と平和を維持  
するを務めたれども其策往々狡狴に出でしかば却て國民

ルイ、ナ  
ポレオン

佛國トル  
コ問題に  
干渉す

の怨みを受け、一八三五年フエシなる者佛王暗殺の陰謀を  
企てたるを機として出版の自由を禁せしは益々國民の望  
に背けり、是より先き佛帝ナポレオンの甥なるルイ、ナポレ  
オンは時運の轉變と共に諸處を流浪し曾て伊太利に従軍  
し後ちスヴズに移りて研學に餘念なかりしが、佛國の内情  
不穩なるを察し一八三六年ストラスブルグに事を擧げた  
るに成らず、捕はれて米國に護送せられたり、  
然れどもルイ、フリップの天下(顛)を覆せんとするの現象相  
續て起れり、其一を東方トルコ干渉の問題なりとす、曩にト  
ルコ王は埃及太守と交戦し、敗れてシリアの地を埃及太守  
に譲りたり、一八三二年トルコ王再ひ埃及太守と兵を構へ  
埃及太守は其子イブラヒムを遣はして小亞細亞に侵入し、



佛國の失  
敗

トルコの首府を襲はしむ、歐州列國之に干涉して埃及の軍を退く、然るに一八三九年トルコ王シリアの地を恢復せんことを圖りしに却て大敗し、英、墾普、魯の諸國は又之を救ひたり、此時佛王は埃及太守に與みしたりしに列國は太守をしてシリアをトルコに還付せしめたるが爲めに大に失敗し爲めに政府に對する國民の憤懣を増長したり、此機に乗じてルイ、ナポレオンはブーロンに上陸して自ら佛帝と號したりしが忽ち捕へられてハム城に六年間幽せらる、恰も此頃佛國のチーア内閣がセント、ヘレナに於けるナポレオンの遺骸を佛國寺院に移し、盛大なる儀式を以て之が改葬を挙げたるは國內にナポレオン黨を起して現王政顛覆の第二因たらしめたり、尋てギゾー内閣を組織して寧ろ保守

故ナポレ  
オンの改  
葬

共和黨、  
社會黨政  
府に抗す

二月革命

主義に傾き、ポーランド及び伊太利に於ける自由運動に左袒して失策し加ふるにルイ、フリッパが私利を謀るに汲々たるは其第三因たるに至れり、特に王が其季子モントペンシル公に嫁するに西班牙女王イサベラ二世の妹を以てし將來西班牙王位を其子孫に得せしめんこの政略を企てたるは英國をして熾に之を駁撃せしむるの口實となり、從て王政の基礎を危からしむる第四因たるに至りぬ、偶々一八四六年より凶年相次きて起りしかば國民不平の餘り諸處に一揆を起し共和黨を始め、自由主義の黨派は政事の革新を唱へ、ルイ、ブランの率ゐる社會黨は財産、労働の平等を主張し、一八四八年二月二十二日を期し十万の不平黨將さに一大革新會を開かんさせしを政府之を禁したり



佛王英國に逃る

共和政府の組織  
ルイ、ナポレオン  
大統領となる

しかば遂に國民の暴動となり、王はギゾー内閣を停めて代  
ゆるにナール内閣を以てし、國民の要求を容れんことを務  
めたれども騷擾容易に鎮らず、王及ひ一族は遂に英國に出  
奔したり、此に於て革進の諸黨は臨時政府を設け、社會黨は  
國立工場の設立を迫りて八万の労働者一時に採用せられ、  
議會は共和政府の組織を唱へたり、其後政府は労働者の數  
を減して無益の冗費を省かんことを試みしに社會黨大に暴動  
を起し、漸くカヴァヰイナック將軍の爲めに鎮制に歸しぬ、

社會黨の一揆は却て保守主義の勢力を高め、此歳新憲法成  
りて佛國は共和政体に變じ、大統領を置きて行政を司らし  
め、其年期を四年と定めたり、是より先きルイ、ナポレオンは  
國內を遊説して大に百姓の望を得たりしが同年十二月大

獨乙に於ける革命運動

統領の撰舉に際して遂に撰はれて大統領とあり、

第四章 獨乙及び伊太利に於ける革命運動

革命の波動は忽ち伊太利に普及するの力ありて佛國に二  
月革命の起るや幾何も無く其餘響は獨乙及び伊太利を動  
かし、獨乙聯邦の諸州は普墮を始め概ね自由愛國の思想に  
因て止むなく憲法の改正を實施したり、一八四八年三月墮  
都ヴエーナに於て學生暴動を始めて宰相メッテルニヒを英  
國に走らし、又ベルリンに於ては人民と兵卒と相衝突し、普  
王は國民の要求を容れて内閣を解散し、國民議會召集の令  
を發したり、

是より先き五百人の各州代表者がフランクフルトに催ふ

Frankfort



フランク  
フォルト  
議會

したる臨時議會は今や公然たる獨乙國民議會に變じて同年五月十八日同地に開かれ、獨乙帝國の復興を議決し憲法の制定に着手し、墺國の大公ジョン中央政府總裁に任せられ、聯邦議會は此時を以て解散したり、

國民議會  
の狀況

翌年獨乙帝國の憲法成りしと雖も國民議會に於ては大獨乙黨と小獨乙黨との二派ありて一は獨乙帝國內に墺國を加ふべしと主張し一は墺國を省きて純然たる獨乙種族の帝國を造るべしと唱へ、兩者相決する所無かりしが撰擧の結果として帝號を普王ウリアム四世に奉るこゝになりしに普王之を辞退し、同時に墺王は議員を召還し、其他の諸州又其例に倣ひしかば國民議會は遂に其目的を果さずして後ち遂に解散せられたり、

普墺の不  
和

獨乙の憲法問題は其後一定するの模様無くして却て聯邦の不和を來し、特に墺國は魯國を頼みとして一八一五年ヴヰエンナ會議の決議を固執し、普國は新聯邦を組織して墺國を除かんことを欲し、兩國自ら相容れざるの有様となり、偶々ヘス州に紛擾起るに際して兩國の關係將さに破れんことせしに魯帝之に干渉して墺國に左袒し、一八五〇年十一月オルミッツに普墺の大使相會して普國は墺國の要求を悉く容れ、畢竟一八一五年の獨乙聯邦の再興となりて漸く局を結べり、

獨乙聯邦  
の再興

ハンガリ  
イ地方の  
叛亂

墺國は獨乙憲法問題に勝を制せしと雖も領内に於けるマジャール、及びスラヴ人の自治運動には頗る苦心したり、ハンガリーの議員コズースト墺國議會にハンガリーの獨立を



要求したるに奥帝斷乎たる處置を執りて之を排けしかば  
 遂にハンガリイ國民叛旗を翻へし、二十万の大兵を募りて  
 奥將ヴンヂシグヲツを破るこゝ數回に及び、偶々魯軍の  
 Windischgrätz  
 干涉に依りてハンガリイの軍將ギルゲイはヴラゴスに敗  
 れ、ユーストを始め愛國の志士は概ねトルコに逃れ、ハンガ  
 リイは再び奥國の統御する所となりぬ、

伊太利の  
 狀況

當時伊太利の狀況を察するに諸州概ね輿論に應じて憲法  
 を改正し、又伊太利統一の思想普く行はるゝこ、雖も北方に  
 位する奥領は其唯一の敵者なり、此に於て一八四八年ヴエ  
 ンナ及びハンガリイに騷擾起るを機こゝ、ロムバルヂイ國  
 Lombardy  
 叛して奥兵を退け、ヴェネチアは臨時政府を創設し、サルヂニ  
 Venetia  
 ア王は公然戰を宣言したり、然れども國民一致團結の力乏

しく、且つ王戰に長せざりしが爲めにクストヰヂの一戰に奥  
 將ラデツキイの破る所となり、奥國の勢亦伊太利に振へり、  
 Radetzky  
 此時羅馬の法王は革命運動を拒こしかば、革進黨は亂を羅  
 馬に起し、爲めに法王は難をゲータに避けたれども、奥國の  
 Gaeta  
 勢恢復せらるゝこ、共に幾何も無くして舊に復し、其他諸州  
 の運動一時又鎮定に歸しぬ、

第五章 佛帝國の創設と伊太利の統一、

佛國の大統領ルイナポレオンは故ナポレオン一世の轍を  
 踏まんこ欲し、只管時運の到るを待ち、僧侶を憐れ庶民の幸  
 福を謀り、國民一般の民心を収むるを務めしかば、事を處す  
 るの時機自ら到れり、然れども國內には共和黨並に王黨の

ルイ、ナ  
 ポレオン  
 大に民心  
 を収む



ナポレオン非常政變を斷行す

猶ほ多く存するあり、加ふるにナポレオンは國會と相容れざること往々なりしも天下の輿望はナポレオンに屬せるを以て議會の反抗は毫も意をなすに足らざりき、此の如き勢なるを以て後にはチアア、ブログリー、モンタレムベルト等の如き舊ブルボン王朝の遺臣も自らナポレオンを翼賛するに至りぬ、一八五一年十二月ナポレオンは時機の熟せるを察し非常政變を斷行して議會を解散し、國民一般の撰舉を執行して自ら十年間の大統領に撰ばれ、新憲法の制定を委任せられたり、翌年新憲法成りてナポレオンは佛帝國の再興を國民に訴へたるに大多數の贊する所となり、遂に一八五二年十二月自ら佛國皇帝となりナポレオン三世と稱したり、列國此政變を聞き一時驚愕したれどもナポレオン

ナポレオン皇帝となる

魯國トルコに戦を宣言す

ン巧みに列國に説く所ありしかば概ね之を承認したり、ナポレオン三世は帝國を創設してパリに新建築を起し、夥多の改良を施し以て一揆の再發を防きたり、彼が己の權力を革固にし傍ら佛國の名聲を輝かさんこの方針に與て力ありしは英國と同盟を完ふして魯國の勢を挫きたるに在り、是より先き魯國は潜かに南侵の策を講じたりしが魯帝ニコラス一世は當時英佛の關係到底同盟するの望み無きを察して南侵策を實行する此機に若く無しとなし、一八五三年大使メンチコフをトルコに遣はしトルコ領内希臘教徒の保護權を得んことを要求し、語氣頗る傲然たり、然るにトルコ政府は潜かに英國公使の後援を得て斷然魯國の要求を拒絶せしかばメンチコフは憤然歸國し、魯帝は直に戦

魯國トルコに迫る

Mentchikoff

Nicholas I.



を宣言して兵をブルス河畔に進めたり之をクリミア戦争の始めとす、  
*Pruth* *Crimea*

クリミア戦争

トルコ兵は魯軍をダニューブ河畔に防ぎ屢々之を破りたり

*Danube*

と雖も一八五三年十一月シノプの海戦に於てトルコ艦隊

*Sinope*

は悉く魯艦に撃沈せられたり、普墺兩國は戦の起るに當て

中立を布告したれども英佛の二國は魯國の跋扈を挫かん

と欲し相同盟してトルコを救ふを名とし翌年魯國に戦を

宣言して直に聯合軍をトルコに派遣したり、英佛は聯合艦

隊を黒海の沿岸ワルナに集中し、更に二艦隊を整へ一はバ

*Varna*

ルナク海に進みて魯國の帝都を侵し、一は遠く東洋に航し

*Pacific*

て魯領カムチヤカを襲ひたり、佛將セント、アルノー及び英

*St. Arnaud*

將ラグラシは聯合軍をワルナよりクリミア半島に送り、同

*Raglan*

年九月英、佛、土の三軍相合してオイパトリアに上陸し、直に

*Eupatoria*

魯軍をアルマの野に破り、進んで本據セバストポルを圍む、

*Alma*

魯將メンチコフ城を守ること頗る固くマラコフ及びレンダ

*Sebastopol*

ンの砲臺容易に屈せず、此時伊太利のサルヂニア王は聯合

*Malakoff*

軍に加はりて兵をクリミアに送り、偶々英佛の兩將相次

て戦没し軍勢一時沮喪したれども忽ち舊に復し、翌一八五

五年魯帝ニコラス歿して其子アレキサンダー即位し、ゴル

*Alexander*

チヤコフ代りてセバストポルを守るに乗じて英佛聯合軍

*Gorchakoff*

急に之を攻めしかば遂に同年九月セバストポルの落城と

なれり、此に於て魯帝は聯合諸國と和をパリに媾し一八五

六年三月パリ條約成れり之に因て魯國はダニューブ河口の

領地及びベッサラビア地方をトルコに讓與し希臘教徒の

*Bessarabia*

セバストポルの落城  
パリ條約



保護權を撤回し、黒海に武庫の創設を禁じ、各國商船の自由に黒海を出入するを得るに至れり、

伊太利の統一

サルヂニア佛國の後援を請ふ

クリミア戦争に依りて魯國は暫く其聲を潜め普墺の兩國又戦端を望まず、佛國獨り戦勝者の威を振ふに當て伊太利サルヂニアは佛國に援を請ひ遂に伊太利統一を完ふしたり、是より先きサルヂニア王ヴクトル、エマヌエルは當代の名士カヴールを擧げて國政を一任し夙に伊太利統一の策を講したりしが、クリミア戦争に魯國の勢稍々遜色を現すや直に兵を出して同盟軍に賛し戦終るの後大に爲すあらんことを期せり、果せる哉バリの媾和に際してカヴールはサルヂニアを代表して列席し、列國に訴ふるに南部伊太利の悲境に沈淪せるを以てし、佛帝ナポレオンと屢々密會し

サルヂニア、墺國に戦を宣言す

ツリーヒ條約

て遂に説くに伊太利統一に後援を借さんことを以てしたり、佛帝ナポレオン乃ち其請を諾し、共に墺兵を伊太利より排斥せんことを誓ひ、一八五九年サルヂニアは佛國と相合して墺國に戦を宣言したり、  
戦起るや伊太利愛國の志士諸國より來りてサルヂニアに應じ、ガリバルデイは義兵を擧げて奮戦頗る力を竭したり、  
ナポレオンは自ら佛軍を令し、マクマホン等の名將を隨へてマゼンタ、及ひソルフェリノの二大決戦に悉く墺軍を破れり、墺帝フランシス、ジゼフは一八五九年七月ナポレオンと私かにヴラフランカに相會してロムバルデイをサルヂニアに割讓するの假條約を結び、又伊太利の諸州は法王の下に聯邦を組織すべきことを定め、同年十一月ツリーヒに



於て愈々本條約を結びたり然るに法王の配下に屬したる  
 タスカニイ、モデナ、パルマ、ローマナの四州は法王の反抗あ  
 りしに拘らずサルヂニア王國に合併したり、爲めにサルヂ  
 ニアはサヴォイ及びナイスの二州を割て佛國に譲りぬ、  
 一八六〇年ガリバルヂイはサルヂニア王國の許可を得ず  
 してシシリイ島に叛旗を翻して遂に全島を征服し、尋てネ  
 ーブルス王國に侵入して之を滅ほし、兩國共にサルヂニア  
 に合併し、王エマヌエルに伊太利王の尊號を奉れり、此に於  
 てヴェニス及び法王領を除くの外伊太利の全土悉くエマヌ  
 エルの下に統一し、一八六一年カヴール初めて國會を開設  
 したり、然れども伊太利國民は今やヴェニス並に法王領をも  
 併せんと欲したれども列國之を肯んせず、佛兵一時羅馬に

シシリイ  
 ネーブル  
 ス共にサ  
 ルヂニア  
 に併せら  
 る

駐屯するこここなれり、ガリバルヂイ之を顧みず羅馬に侵  
 入したりしが佛兵の傷くる所となりて捕はる、一八六四年  
 伊太利王は佛國と條約を結びて法王領を襲はざるを約し、  
 フロレンスは伊太利の首府に定められたり、  
 Florence

第六章 北米南北州の葛籐と南米の變遷

合衆國の  
 進歩  
 北米合衆國は獨立以來三十餘年海内無事を極め、ワシント  
 ン大統領の職を奉ずる前後八年、孜孜として國家の基礎を  
 固めしかば合衆國の富強日に進歩の域に向へり、又國內に  
 フェデラル黨(中央集權に重きを置く黨)と共和黨(各州の自治權に重きを置く黨)の二  
 派ありて互に相競ひ益々國力の進歩を來せり、  
 一八〇一年共和黨のジェフソンJeffersonはれて大統領となり、不



世出の英才を懷きて政府の組織を整頓し、憲法の實施着々其効を奏し、此時代にルイジアナ州を佛國より購求し、爲めに合衆國の領土舊に倍するに至り、其他二三の新州加入して國運益々駸々たり、されば佛國革命以來歐州の天地戰端相續くの時機に際して合衆國は獨り平和を維持し、交戦國との貿易權を掌握して大に國富を増加したりしに、偶々英佛二國が干戈を交ゆるに當て互に自國の港灣を封鎖しければ合衆國の商船は之が爲めに一打撃を蒙れり、然のみならず英國は濫りに米國商船を捕獲して之を検し米國の貿易に尠からざる損耗を加へしかば一八一二年大統領マデソンの時合衆國は英國に戰を宣言したり、爾來兩國交戦すること三年に及び、一八一四年セントの和議成りて漸く局

英米の戰爭

Chent

を結びぬ、英國との戰爭以來合衆國は世界強國たるの實を擧げ、一八二三年大統領モンローはモンロー主義を發表して歐州列國の米國に干涉するを防ぎ益々強硬の策を執れり、此時代に西班牙領フロリダ州は合衆國に購入せられ、又メキシコの屬領たるテキサス州は一八三五年叛して合衆國に加入せんことを請ひしに合衆國に於て之を容れしかば遂にメキシコとの交戦を來し、メキシコ大敗してニューメキシコ及びニューカリフォルニアの二州を合衆國に割譲したり、然るに今世紀の中葉に至り、測らずも奴隸存廢の問題合衆國の南北に喧し、蓋し南部諸州に於て棉花の耕作富源となるを以て之に従事する奴隸の必要あれども北州に於て

モンロー主義

Monroe

Florida

メキシコとの交戦

Texas

New Mexico

New California

奴隸問題



米國南北諸州の關係危し

は奴隸使役を以て人倫に背き、社會の進歩を妨ぐるを爲し、一八三二年以來奴隸廢止を唱ふるの政社陸續として北州に起り其數千を以て數ふるに至れり、是より先き此問題を氷解せんを欲し、Missouriミズソール條約なる者國會を通過し、北緯三十六度三十分を以て南北の境とし、南部には依然奴隸制度を施行したりしに後に此條約も其實行を見ざるに至り、偶々一八五二年カンサス及びネブラスカの兩州が新たに合衆國に加入するに就き兩州に奴隸制度を施行するや否やの議國會に紛々たりしが、遂に兩州の意に任ず事に一決し、兩州は北部に加担して非奴隸説を執りぬ、爾來南北の關係穩かならず、一八六〇年共和黨の  
Abraham Lincolnアブラハム、リンコルン非奴隸派より撰はれて大統領となるや南部諸州は南カロSouth-

南北戦争の起因

戦争の模様

ライナ卒業して合衆國を脱し、アメリカ聯邦の名を以て全然北部を分離し、Carolinaデーヴス撰はれて大統領となれり、北部に於ては南部の處置の憲法に違反せるを咎めず、唯た其爲す所に任せしに一八六一年四月南部の聯邦軍がチャChar-ーleston港のサムター城を攻めて之を陥るゝや、北部諸州大に憤り、此に愈々南部を討ちて其罪を凝らさんことを決したり、北米の南北戦争此に於てか起れり、南軍は士卒の訓練遙かに劣れるにも拘らず、Leeリー、及びジャクソン等の諸將初め大に北軍を破りたり、然れども是れ偶然の勝利に過ぎずして一八六三年大統領リンコルンが一たび奴隸解放令を發するや南部に屬したる奴隸逃れて北軍に應ずる者多く同年五月チャChancellorsvilleンセロールスヴールの戦にジャクソン戦没



し尋て七月ゲッヂスブルグの戦にリーは北軍の將メアード  
 Meade の破る所となり、同時に北軍のグラント將軍は南軍をヴイク  
 Vick- スブルグに虜にし、又南部の諸港は概ね北軍の封鎖する所  
 Sburg となり、南軍今や殆ど連戦連敗の悲境に陥りたり、同年十一  
 月グラント將軍がチャタヌーガに南軍を破りて深く敵地  
 Chattanooga に入入するや南軍の勢全く盡き、一八六五年四月ピーター  
 Petersburg スブルグの一戦は遂に聯邦の首府リッチモンド城の陥落を  
 Richmond 來し、南軍終に降を請ふに至れり、  
 是歳リyncholn 再び撰はれて大統領の職に登りしに不幸  
 にして弑せらる、戦の終るや合衆國は憲法を改正して奴隸  
 を禁し尋て奴隸に公民權を附與し、Johnson 大統領に登り  
 て戦後合衆國の處置を圖りたれども南部諸州が猶ほ數年

戦後の處置

南軍降参す

メキシコ  
の状況

南米の状  
况

の間敵意を表せしを以て頗る經營に苦心したり、一八七〇  
 年に至りて南北の統一漸く舊に復したり、  
 又メキシコ州は合衆國と交戦以來黨派の争甚しく、國內爲  
 めに大に紊る、佛帝ナポレオン三世此機に乗じ、メキシコに  
 新帝國を創設せんを欲し、一八七三年遂に之を征略し、王冠  
 を奥國皇弟マキシミリアンに與へたり、然るに合衆國之を  
 Maximilian 肯んせず、ナポレオンは止む無く兵を撤せしかばマキシミ  
 リアン王は獨りメキシコに留まり遂に獨立軍の爲めに弑  
 せらる、爾來メキシコは舊に復して大に文運の進歩を來し、  
 國力頗る見るに足るに至りぬ、  
 南米ブラジルに於ては王黨と自由黨との争甚たしくして  
 王ドム、ペドロ本國西班牙に歸り其子ドムペドロ二世立ち、  
 Dom Pedro Dom Pedro II.



商工業頗る發達し交通の便大に開けたりしが、一八八九年革命起りて共和國となれり、又南方チリ國はベル及びボリビアの二國と兵を交へたり勝を制して大に領土を擴張したりしも一八九一年内亂起り立法派の勝に歸したり、

第七章 普墺の爭覇

シユネス  
ヅ非ヒ、  
ホルスタ  
イン問題  
普墺兩國は佛國二月革命以來其關係穩かならざりしが獨乙北部のシユネスウヰヒ、ホルスタイン問題は延ひて兩國の雌雄を決するの基とはなりぬ、抑も此二州はデンマルクに屬すも雖も住民は過半獨乙種族なるを以てデンマルク王は特別の政を施し、王はホルスタイン候の名を以て獨乙聯邦に加入せり、然るに二州の國民は常にデンマルク政府に不

平を懷き、デンマルクの王統が將さに絶へんことを欲し、一八四八年二州の獨乙種族遂に叛を圖れり、此に於て獨乙聯邦の軍兵叛亂を援けしかば英魯の干涉する所となりて普國はマルミーニに休戦を約したり、然れども叛亂は猶ほ全く鎮定せざりしが、一八五二年列國ロンドン會議の結果に依り二州は依然デンマルクの屬領たるを定められたれども二州は容易に此條約を奉せざりき、

ウヰリアム一世普王とある  
一八五七年ウヰリアム一世普王の位に登り敏腕を奮て普國の活氣を鼓舞しビスマルクを擧げて托するに一切の政事を以てせしかば普國の形勢爲めに一變したり、一八六三年デンマルク王フェルデナンド七世シユネスウヰヒ分離の勅令を



發し之をデンマルク州に併せんことす、普奥二國は其ロンドン條約に悖れるを名こして兵をデンマルクに派遣し、デンマルク王に迫りてシュレスウヰヒ、ホルスタイン二州の政權を普奥兩國に譲らしめたり、然るに二州の分割に就き普奥兩國は激烈ある争を爲し、事將さに破れんとせしに一八六五年八月普奥の両王俄かにガスタインに會し普國はシュレスウヰヒを司配し、奥國はホルスタインを維持することを定めたり、

普、奥の關係益々危し

されども此問題は畢竟ガスタイン會合のこを以て落着せず、奥國は此問題を聯邦議會に提出せんことを主張し、普國は之に反對したり、此に於て兩國の關係危機に迫れるを見、ビスマルクは潜かに伊太利サルヂニアを攻守同盟を結び

以て奥國に備ふる所あり、一八六六年奥國は斷然此問題を聯邦議會に提出せしかば普國は直に兵をホルスタインに派遣し同時に聯邦議會の解散を命したり、勢此に至りて普奥兩國は遂に干戈を交ゆるに至りぬ、世に之を普奥戦争と稱す、

普奥戦争

普國の軍略は時の陸軍大將モルトケ之を擔任し、出兵準備

Moltke

サドワの戦

の迅速にして毫も過失なかりしは奥國爲めに一驚を喫したり、一八六六年六月普國は進撃の策を執り普王ウヰリアム及ひモルトケは共にベルリンを出發したり、奥國の本軍はベネデック之を率ゐてボヘミアに集中したりしかば普王は七月諸軍を聯合してサドワの野に奥國の大軍を襲ふて大に之を破り進んでプラゲを陥れ將さに奥都ヴェーナを

Benedek

Bohemia

Sadowa

Prague



衝かんとす、奥帝フランシス、シ、ゼフは此戦に勢挫け同年八月遂に佛國の仲裁を請ひ普國とブライトグに和議を締結したり、

普奥戦争の結果

此條約に因りて奥國は獨乙聯邦を退きてシ、レスウ、ホ、ル  
スタイン二邦の主權を普國に譲り又普國の要求に従てヴェ  
ニスを伊太利に割譲したり、普國はシ、レスウ、ホ、ル、スタ  
インの二州並に普國に敵意を表したるヘ、ス、カ、セル、及びナ  
サウ等の諸邦を併して大に其領土を擴張し、新たに聯邦を  
組織して北獨乙聯邦と稱し、普國其主權を握りて一八六七  
年第一回聯邦議會を開き、ビスマルク之が總裁となりて新  
憲法を制定したり、永年の紛擾を極めたる普奥の争此に氷  
解し、普國は優に獨乙の覇權を掌握するに至りぬ、

普奥戦争は奥國內の政事を一變し、ハンガリイは自治制を  
許され、奥帝はハンガリイ王を兼攝するに至り、法律軍制の  
改革を勵行し、財政の整理を務めしかば國力の復興速かに  
成りぬ、

第八章 普佛戦争と其影響

戦後の普  
國と佛國

普國戦後の形勢は日に進歩の域に向ひ、上にウリアム一世  
の明君あり下にビスマルク、モルトケの文武の良臣ありて  
聯邦の基礎益々鞏固となりぬ、佛帝ナポレオン三世は普奥  
の葛籐に乗して大に得る所あらんことを期したれども普  
國の敏捷なる軍略忽ちにして奥國を服したるには聊か失  
望したり、然れども普國に一臂を加へんと欲し、戦争終るや



ナポレオンはライン河畔の地を佛國に譲らんことを請ひしにビスマルク一言の下に之を退け、尋て和蘭のルキセムブルグを購求せんことを圖りしに是又普國の拒む所あり、ナポレオンは恥辱を天下に曝らし怨を普國に狹むに至れり、

西班牙王位問題

偶々一八六八年西班牙女王イサベラの弊政は國內に一揆を惹起して王難を佛國に避けたり、西班牙國會は臨時政府を設け一八七〇年普王の分統なるホーヘンツォルン家のレオポルドに西班牙王位を呈したり、佛國は之を以て普國の膨大を高むる者爲し、普王にレオポルドの即位を停めんことを求めたるに普王之を容れざりしがレオポルドは事の穩かあらざるを見て自ら位を辭したり、然るに佛國

佛國の宣戰

は之を以て安んぜず更に大使を普王の許に遣はしレオポルド即位を禁するの確答を要求したるに普王斷乎として之を排し、大に佛國の大使を叱責したり、佛國は普國の傲慢を憤り遂に宣戰の布告を國內に發表したり、實に一八七〇年七月なりき、

佛國の策略

佛帝ナポレオンは夙に南獨乙が普國に叛して佛國に加祖せんことを豫想して自ら大軍を率る元帥マク、マホンと共に南獨乙に進み、元帥バゼインはライン軍を指揮してロレンス地方に陣し以て普軍に衝るの謀を執れり、然るに普國の大將モルトケは佛國の軍略の此に出るを洞見し、佛國

普國の軍略

に先んじて三軍を整へ、スタインメツ、フレデリック、チャールス、皇太子フレデリック、ウリアムの三將之を指揮して直に南



獨乙方面より佛國の境を攻撃せしかばナポレオンの計畫  
 全く齟齬したり、故を以て佛軍は到る處に連敗せザールブ  
 リツケン、ワイセンブルグ、ウールト、スピ、ヘルン等の激戦に悉  
 く敗れ、佛將バゼインは遂にメッツ城に籠りたりしに普將フ  
 レデリック、ナヤールレスの爲めに破らる、此に於てナポレオン  
 はマク、マホンと共に大軍を集めてセダン城に據り以て普  
 軍を防かんこす、普王ウリアム三軍を令して一八七〇年九  
 月一日セダン城を圍み之を攻むること急なりしかば遂に  
 城陥り、ナポレオンは部下の將士を率て降参したり、  
 セダン落城の報一たびパリに達するやトロヒユ、ジュールフ、  
 ブル、ガムベッタ等の共和黨は直に帝政を顛覆して共和政治  
 を設け、パリ城の防禦を嚴にして以て普國と平和の議を開

セダンの  
戦

帝政の顛  
覆

かんことを決したり、然るに普國がアルサス、ローレーンの  
 地を要求せしは佛國をして依然戦を持續せしめたり、此に  
 於て普軍は愈々パリ攻撃に決し、ワルセイユに本陣を控へ  
 四方よりパリ城を圍む、既にして佛國の堅城ストラスブル  
 グ陥り尋てメッツ城又降りしかば今やパリ城は恰も孤立の  
 姿ごかり糧食日に乏しく士卒の銳氣又漸く沮喪して如何  
 ごもする能はず遂に翌年一月に至りて落城したり、佛國は  
 休戦を約してワルセイユに假條約を結び普國の請求を容  
 れてアルサス、ローレーン二州と價金五億フランを讓與す  
 ることを諾したり、  
 是より先き普軍パリ城を圍めるに當て獨乙聯邦の君公は  
 普王ウリアム二世に獨乙皇帝の稱號を奉りしかば普王は

パリ城圍

ワルセイ  
ユ條約

獨乙帝國  
の復興



獨乙帝國の憲法

之を受けてワルセイユの陣中に盛大なる即位式を挙げたり、獨乙帝國此に再ひ成る、幾何も無くパリの落城となりて普王はベルリンに凱旋し一八七一年三月帝國議會を召集して新憲法を制定し、歴代の普王獨乙帝位を世襲して宣戰媾和の權を握り、聯邦議會と帝國議會の二者ありて國事を議し、各邦の施政は各其意に任かせたり、其他交通運輸の機關等は帝國内に一定の法を設け、戦後獨乙帝國の勃興實に著しき者あるに至れり、

伊太利の統一

伊太利の法王領は從來佛國の保護を受けて獨立を維持したりしが今や佛國が普國に降りしに乘して伊太利王エマヌエルは兵を率ゐて法王領に侵入し遂に之を併したり、此に於てか伊太利全半島の統一完成し、エマヌエルは此時都

舊教の改革

を羅馬に遷し、法王は啻に宗職を左右するに止まるに至りぬ、時の法王バイアス九世は在職三十餘年の久しきに及び、舊教部内の改革を施せること尠からず一八七〇年羅馬の大寺院に大會を開きて法王は社會問題に關し全舊教寺院を左右するの特權を有することを議決し、益々法王職の尊重すべきを發表したり、

西班牙の状況

又普佛戦争の根源たる西班牙は其後伊太利王の次子アマデウスを戴きて王ごしたれども國內黨争甚しくして王は一八七三年位を辭したり、爾來國內の紊亂更に甚しく、一八七四年前女王イサベラの子アルフォンソ迎へられて位に即き、國內漸く静まりぬ、



第九章 魯土戦争

トルコ属領の叛乱

一八七五年トルコの属領ヘルツェゴヴィナ及びボスニアの二州叛を謀る隣邦セルビア及びモンテネグロ共に之を援けしかば勢頗る猖獗にして容易に鎮定せず尋て翌一八七六年ブルガリア國又トルコの苛政に堪へ兼ねて事を舉げしかばトルコは直に兵を遣はして之を平けたり然るに此時トルコの兵士残忍酷虐の策を施せしは大に耶蘇教國民の感情を害し獨塊魯の三國はトルコ朝廷の反省を促かすの急務なるを察し五ヶ條の要件をトルコに訴へ宗教の自由租税の減少其他施政の改良を迫れりトルコ政府は之を承諾したれども叛民は其實行の望みなきを信じて依然こし

て鎮まる所無し此に於て獨塊魯の三國はベルリン決議と稱して二ヶ月の休戦を叛民に許さんことを以てしたり英國はトルコの危難を察して之を諾せず潜かに備ふる所ありしがトルコは魯國の威を怖れて遂にベルリン決議を承諾したり

列國とトルコとの關係一變す

此事たるトルコ王アブズル、アジズの廢立となり、ムラド五世立ちて羸弱なりしかば忽ち罷められて其弟アブズル、ハミッド位に登り、列國との關係此に一變し、從來トルコ朝廷に其威を振ひたる魯國大使イグナチーフは全く其權を失し、英國之に代てトルコ政府を左右するに至りぬ、此に於てか魯國政府はトルコ朝廷の改革を促かすこと愈々切ありしにトルコは英國の後援あるを以て屢々魯國の請を拒絶



魯士戰爭

したり、一八七七年魯國はトルコ領内の耶蘇教民を保護するを天下に公言し魯國民をしてトルコ屬領の叛民を援けしめたり、トルコ此に於てか遂に魯國と交戦するに至りぬ、一八七七年魯國は進撃の策を執り、大軍を派遣してダニユー河を渡り、直にシプカの要路を占領す、其勢疾風の走るが如き有様なりしもトルコのオスマン、パシヤが非凡の勇敢を以て相對するに當て魯軍の勢稍々沮喪せり、然れども此歳十二月オスマン、パシヤはプレヴナに於て力盡き遂に四万餘の士卒と共に魯軍に降り、魯軍此に於て直にアドリアノプルを占領し將さにコンスタンナノプルを衝かんす、トルコ即ち救を英國に請ひ魯國との仲裁を訴ふ、魯國は列國の干涉を欲せず、翌年三月トルコに速かにサン、ステファン

サン、ステファン

の條約

ベルリン條約

の條約を結び、ブルガリアの保護權を得て大にトルコの國勢を消沈せしめたり、然るに英國を始め獨逸、諸國は魯國の潜越を憤り今や將さに列國の間に一大危機を來さんごしたりしが同年六月ベルリン會議に依りて漸く局を結びたり、之に因てセルビア、ルーマニア、モンテネグロの三國は獨立を承認せられ、ブルガリアは二州に分れてトルコの保護國となり、魯國は漸くカース城を得たるに止まりて戰爭の利益は一步を列國に譲りたるの姿に異ならず、然れども爾來トルコは列國注目の焦點となりて國際上頗る多事の國となれり、

第十章 最近西洋諸國の形勢



魯土戰爭  
後の歐州

魯土戰爭以來歐米諸國は比較的平に和の關係を保ち以て今日に至れり、唯た現世紀の中葉より社會黨なる者歐州に起りて漸次其勢力を各國に及ぼし、又到る處勞動問題喧しく、一方には國家主義の念強くして貧民保護等の事日に煩雜に赴けり、要するに國家の獨立を維持して國民一般の幸福を増進せんことを各國の均しく傾ける所なるに似たり、

佛國

佛國は戰後共和國に變じて國民舉て國力恢復に務めたり、しも社會黨の暴動激しく、共和政府爲めに頗る之が鎮壓に苦心したり、社會黨暴動の爲めにパリ府の宮殿樓閣多くは灰燼に歸したり、然れども漸次舊に復し、商工業又發達の域に向へり、又獨乙は戰後國力大に勃興し、ウリアム老帝を始

獨國

魯國

め文武の良臣相一致して帝國の平和と實力の發揮とに力を注ぎしかば帝國の勢旭日の東天に於けるが如し、されど佛國が復讐の念強きを以て之に備へんが爲めに、埃伊の兩國と同盟を結びたり、しも歐州の大勢は寧ろ平和を維持するに傾けるを以て、兩國の關係は現今却て親密の交際を爲せるの觀あり、

魯國は獨塊の同盟に衝らんが爲めに佛國との同盟を企てたれども、果さず、國內虛無黨の出沒甚しくして常に王室を害せんことを圖り、一八八一年魯帝アレキサンダー二世は終に虛無黨の弑する所となる、歴代の諸帝相次て奴隸を解放し、貧民の救護に力を盡す、雖も君主專制の威嚴猶ほ甚た強きを以て社會進歩の今日魯國の虛無黨は依然として



消滅する所無し、

英國

歐洲の大勢

獨り英國は超然として孤立し、陽に商工業の發達に全力を注ぐを示して、陰に列國の形勢を窺へり、此外歐洲の小列國皆平和の内に進歩を遂ぐるに雖も要するに歐洲社會の大勢は今や英佛獨魯奧の五ヶ國に依りて左右せられ、是等の列強は孰れも權力の平衡を有すれども、弱肉強食の理は猶ほ依然として行はれ、自衛に汲々として餘力を弱邦に及ぼさんとするは其通策なるが如し、

希、土戰争

トルコの領内には夥多の耶蘇教信者あり、トルコ人屢々之を害するを以て列國はトルコに其保護を迫るに幾回あるを知らず、一八九五年トルコ人がアルメニア及びクリト島に住する耶蘇教徒を虐遇するや列國大に之に抗した

埃及

れどもトルコ朝廷は荏苒日を空ふして顧みざりしかば希臘は翌年遂にトルコと開戦したり、然れども希臘大に敗れて和を媾し、セッサリイ州と償金をトルコに讓與したり、爾來希臘の國力日に非なり、

Isma'il Pasha

埃及は元ミトルコの屬邦なりしが太守

Abyssinia

の時にトルコ王に迫りて讓歩を促かし殆ど獨立の姿となり、然れども隣邦

事<sup>Abysinia</sup>を起したるが爲めに甚く財政の窮乏を來し、遂に之が爲めに英佛の干涉を受くるに至れり、一八七八年太守はスエズ運河の株券を英國に賣渡し、財政の整頓を英佛に委ねたり、一八八一年アラビ、バシヤ亂を起し政府を脅赫するや英國は兵を出してアレキサンドリアを砲撃し、アラビ、バシヤ

Alexandria



英國

消滅する所無し、

歐洲の大勢

獨り英國は超然として孤立し、陽に商工業の發達に全力を注ぐを示して、陰に列國の形勢を窺へり、此外歐洲の小列國皆平和の内に進歩を遂ぐるに雖も要するに歐洲社會の大勢は今や英、佛、獨、魯、奧の五ヶ國に依りて左右せられ、是等の列強は孰れも權力の平衡を有すれども、弱肉強食の理は猶ほ依然として行はれ、自衛に汲々として餘力を弱邦に及ぼさんとするは其通策なるが如し、

希、土戰

トルコの領内には夥多の耶蘇教信者あり、トルコ人屢々之を害するを以て列國はトルコに其保護を迫るに幾回あるを知らず、一八九五年トルコ人がアルメニア及びクリト島に住する耶蘇教徒を虐遇するや列國大に之に抗した

Armenia

Crete

埃及

れどもトルコ朝廷は荏苒日を空ふして顧みざりしかば希臘は翌年遂にトルコと開戦したり、然れども希臘大に敗れて和を媾し、セッサリイ州と償金をトルコに讓與したり爾來希臘の國力日に非なり、

Thessaly

埃及は元とトルコの屬邦なりしが太守イスマイル、パシヤ

Isma'il Pasha

の時にトルコ王に迫りて讓歩を促かし殆ど獨立の姿となり、然れども隣邦アビシニア等と交戦し、又國內に土木工

Abyssinia

事を起したるが爲めに甚く財政の窮乏を來し、遂に之が爲

めに英佛の干涉を受くるに至れり、一八七八年太守はスエズ運河の株券を英國に賣渡し、財政の整頓を英佛に委ねたり、一八八一年アラビ、パシヤ亂を起し政府を脅赫するや英國は兵を出してアレキサンドリアを砲撃し、アラビ、パシヤ

Suez

Arabi Pasha

Alexandria



を捕へて流罪に處したり、爾來英國の勢獨り埃及に振ふに至りぬ、此他亞弗利加の諸方には列國競ふて殖民地を設け、亞弗利加の沿岸今や殆ど歐洲の殖民地ならざるは無し、一八九九年英國は南弗のトランスワール共和国と境界問題より隙を生し英、杜戦争今や南弗に日々熾んあり、是より先き西印度のキューバCuba、嶋本國西班牙に叛きて獨立を承圖る、合衆國之に干渉し西國に迫りてキューバ嶋の獨立を承認せんことを以てし、遂に一八九八年米、西戦争を生しぬ、兩國の海軍キューバ並にフィリッピン群島に交戦したりしが西軍敗れて和を媾し、キューバ島の獨立を認め又フィリッピン群島を合衆國に讓與したり、然れどもフィリッピン群島の住民合衆國の施政に服せず叛亂屢々起りて今に鎮定する所無し、

英、杜戦争

米、西戦争

第十一章 東洋に於ける西力

現世紀は世界共通の時代にしし亦西力東漸の時代なり、蓋し東洋諸國が從來社會の文明に後れて歐洲列國をして之を伺ふの機を現はせしに因るあり、魯は北より英佛は南より陸續として東洋を襲へり、一八三九年英國は阿片事件より支那帝國と交戦し、清廷を屈服せしめて香港を得且つ上海、寧波、福州、廈門、廣東の五港を開放せしめたり、爾來外國との交通頗る頻繁となりしが清人往々外人に暴働を働き、一八五六年英船を脅かし、佛國宣教師を殺害せしかば英、佛聯合して罪を清廷に問ひ、廣東を陥れて天津に迫り、遂に北京を攻めて之を陥れたり、清廷

阿片戦争

英、佛聯合して支那を討つ



東印度に於ける英國

恐れて和を講し莫大の償金と新貿易港の開放を約しぬ、又東印度に於ては本國政府の直轄に歸せしより其勢力大に振ひ一八四九年にパンジヤブ地方を併し、尋て一八五六年ウード地方の主權を握れり、然るに印度の回教徒は英人を憎むの餘り土人を煽動して一八五七年叛を謀りしが遂に鎮定せらる、爾來印度の主權は全く英王に屬するに至り、一八七七年英王ヴクトリアは印度女王の稱號を冠することありぬ、

魯國の南

魯國は中央亞細亞に於て南侵の實を擧げ、キエフ、メルヴの両地方を併し、又コーカンド地方を占領して殆ど印度と境を接するに至りしかば英國は之に抗議し、將さに兩國の交戦を見んとせしに一八八七年兩國の協議整ひて印度との

安南

境界を確定するに至りぬ然れども爾來魯國は機に乗じて南侵策を施し、漸次中央亞細亞を蠶食するの傾きありて爲めに英、清兩國との交渉嘗て止む時無し、又南亞に於ては佛國頻りに安南地方に注目し一八八三年遂に武力を以て之を佛國の保護國となしぬ然るに清國は安南は其屬邦なりと稱して異議を唱へ、一八八五年佛國と交戦したりしが、兩國の和成りて安南は佛國の保護國と成れり、尋て英國は緬甸を侵して之を併し將さに暹羅國をも滅ぼさんと欲すれども佛國の遮るる所となりて今に果さず、

緬甸

日清戦争と列國

一八九四年朝鮮事件より日清戦争起るや清軍連戦連敗して翌年遂に馬關に條約を結び、遼東半島及び臺灣を日本に



割讓するを約し、又莫大の償金を拂ふを諾せり。歐州列國此に始めて日東帝國の強きを知り、條約成るや獨、佛、魯の三國干涉し、遂に遼東半嶋を清國に還付せしめたり。爾來列國は清朝の與とし易きを知り、遼東還付の功を名こして相次て清國に迫り、獨は膠州灣地方を占領し、魯は旅順口を取り、又滿州鐵道敷設權を得、英國も又之が權衡を保たんが爲めに威海衛を占領したり、尋て伊太利又清國に要求する所あり、支那老帝國の内情實に憫むべしと謂ふべし。歐國の列強今や日に月に東洋の天地を伺ひ、太平洋の沿岸多事ならん。す此中間に位して優に東洋の天地を左右し得る日本帝國の臣民夫れ三省せずして可あらんや、

第十二章 第十九世紀の進歩

社會文明の進歩は實に十九世紀を以て最も盛なりとす、蓋し人智の開發は自ら諸科學の進歩を促かし、諸科學の進歩は之に伴ふて幾多の新發見を來たし、以て社會の文明に貢獻する所多きを以てに因るなり、

空前の大發明

特に最近進歩の著しきは實に科學の應用に依りて創見せられたる諸機械の發明なりとす、之が爲めに社會生活の狀態、交通運輸、農工商其他百般の事業に著しき變動を生せしを以て見れば其社會に及ぼしたる影響大なりしを知るに足らん、小は瓦斯燈、瓦斯熱電燈、石版寫眞術等の如きより大は蒸氣機關、蒸氣船、鐵道、電信、電話等に至るまで古人の夢想



蒸氣力

たもせざりし者陸續として世に出てたり、吾人今就中主なる者に就き略述する所あるべし、蒸氣力は既に十七世紀の頃より之を利用せんことを試みたりしが一七六九年に至りて英人 James Watt ジェームス、ワット始めて其應用を完成したり製造業並に採礦術等爲めに一變し、生産力の發達今日あるを致せるは全く此蒸氣力應用の發明に基するなり、

蒸氣船

蒸氣船の應用は一八〇七年米人 Robert Fulton ロバート、フルトン始めて之を New York ニュー、ヨルクに實驗せしに起る、爾來列國競ふて其術を習ひ、從て造船術の進歩も著しく初めは啻に蒸氣端艇に過ぎざりし者なりしも漸次其構造も宏大となり一八一九年には既に英米間の大洋を航する者あるに至れり、

鐵道

鐵道は十八世紀の頃より運輸の便に供したりしが蒸氣力を應用して完全なる鐵道機關車を創始したるは英人 George Stevenson ジョージ、スティーヴンソンの力に依る、一八二五年には英國に於て之を運輸に用ゐる、一八三〇年 Liverpool or Manchester リヴァプールとマンチエスタとの間に始めて貨物並に旅客の運轉を開始したり、今や世界到る處鐵道の縱横に馳驅せざるは無く其交通運輸に至大の便益を與ふるや問はずして明らかなり、

電信

電信は始め獨人 Somnning センメリング電氣を用ゐて通信を試みたりしが其後 Orsted デンマルク人オルステッド電磁氣を發明してより一八三三年に至り獨人 Gauss ガウス及び Weber ウェーベル之を電信に應用して以て完全ならしむるを得たり、又海底電線は一八五一年英佛の間に敷設せられたるを初めとし一八六六



電話

年には大西洋海底電線成りて歐米の間の通信に一變を來せり、尋て一八七七年米人グラハム・ベルは電話機を完成して今日の隆盛を見るに至れり此他電氣の應用は科學の進歩と共に益々廣く電燈、電車、無線電信等百般の工藝今や電氣の力を利用する者夥しこぞ、

醫術、武器の進歩

又科學の進歩は醫術の著しき變動を來して人命救助の道益々備はるに至り又武器上に一新を生じ銃砲彈藥精巧を極め、又近日又光線の發明は醫學上に著しき影響を與へんこぞ、

理學

翻て智能的の進歩を察するに理科に於ては數理、天文、物理、化學、博物等皆迅速の進歩を來し、中にもDarwin ダルヴィンの生物進化説、Meyer マイエル、及びHelmholtz ヘルムホルツの勢力不滅説の如きは共

哲學

に一世を風靡せり、哲學は獨乙に勃興して頗る進歩し、Kant カント出て、世界の思想を風靡し、次てHegel ヘーゲル、Schopenhauer ショーペンハウエル、Fichte フェヒテ、Hartmann ハルトマン等相續出して各々一家の哲學系統を組織したり、又史學に於ては獨にRanke ランケ出て、純然たる史的研究の方針を

定め、Sybel シーベル、Treitschke トライチケ、Mommsen モムゼン等相次きて獨乙史學の隆盛を來し、英にはFreeman フリーマン、Green グリーン、Gardiner ガーデナーあり、佛にはTaine テイン、Guzot ギゾットありて皆共に今世史學に貢獻せる所尠

社會の慈善事業

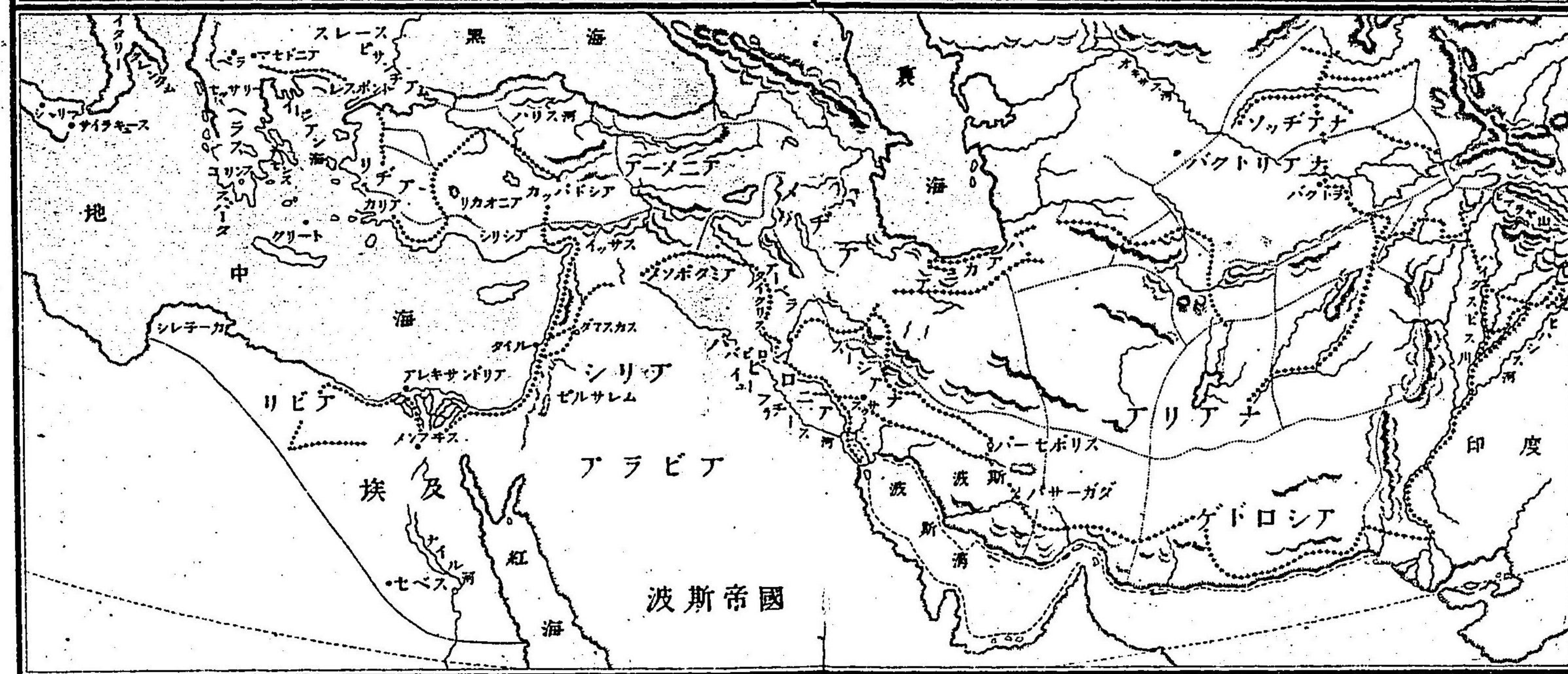
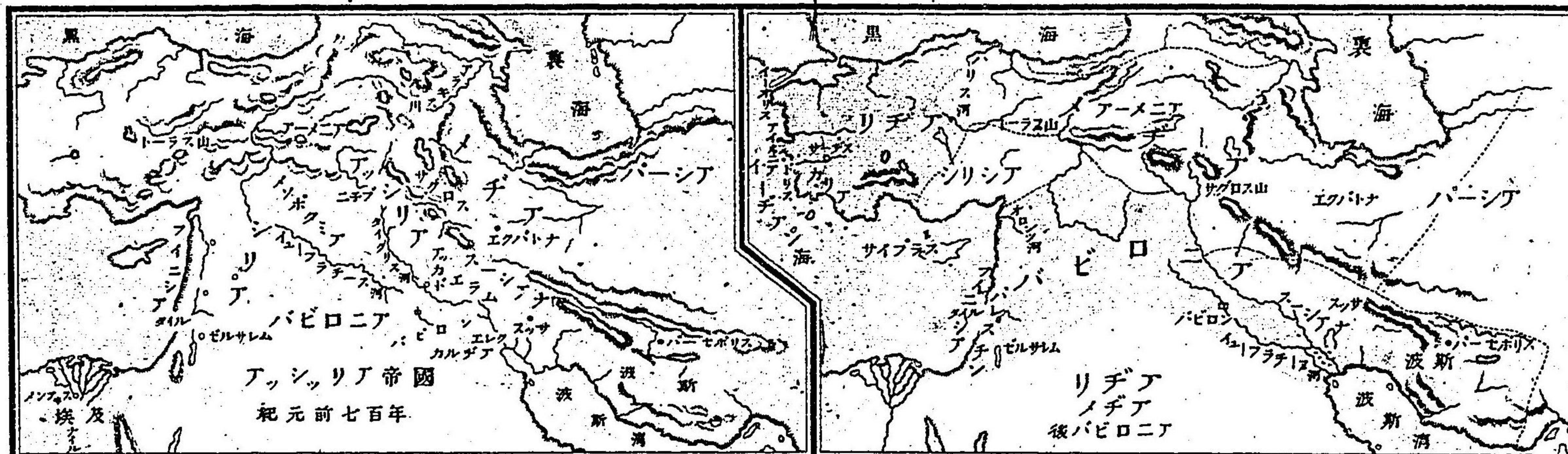
からず、此他文學、美術等の發達又頗る見るに足れり、社會の進歩は人生の同じく貴重なるを感じて博愛慈善の事業著しく勃興したるは今世紀の特色なりこぞ、慈惠病院、孤兒院、盲啞院等を始め貧民救助會、免囚保護會の如き夥く



起り、又赤十字社なる者ありて戦時の負傷者を救助監護するに至れり、  
今や此等の社會的文運は日々に駸々乎こして進歩せんとす、其進歩や極めて平穩なりと雖も人間社會の思想並に生活の状態に至大の影響を有する者なれば史學的現象の根本的變動は實に文明の如何に關係すること尠少なからざるを知るべし、

## 西洋史終

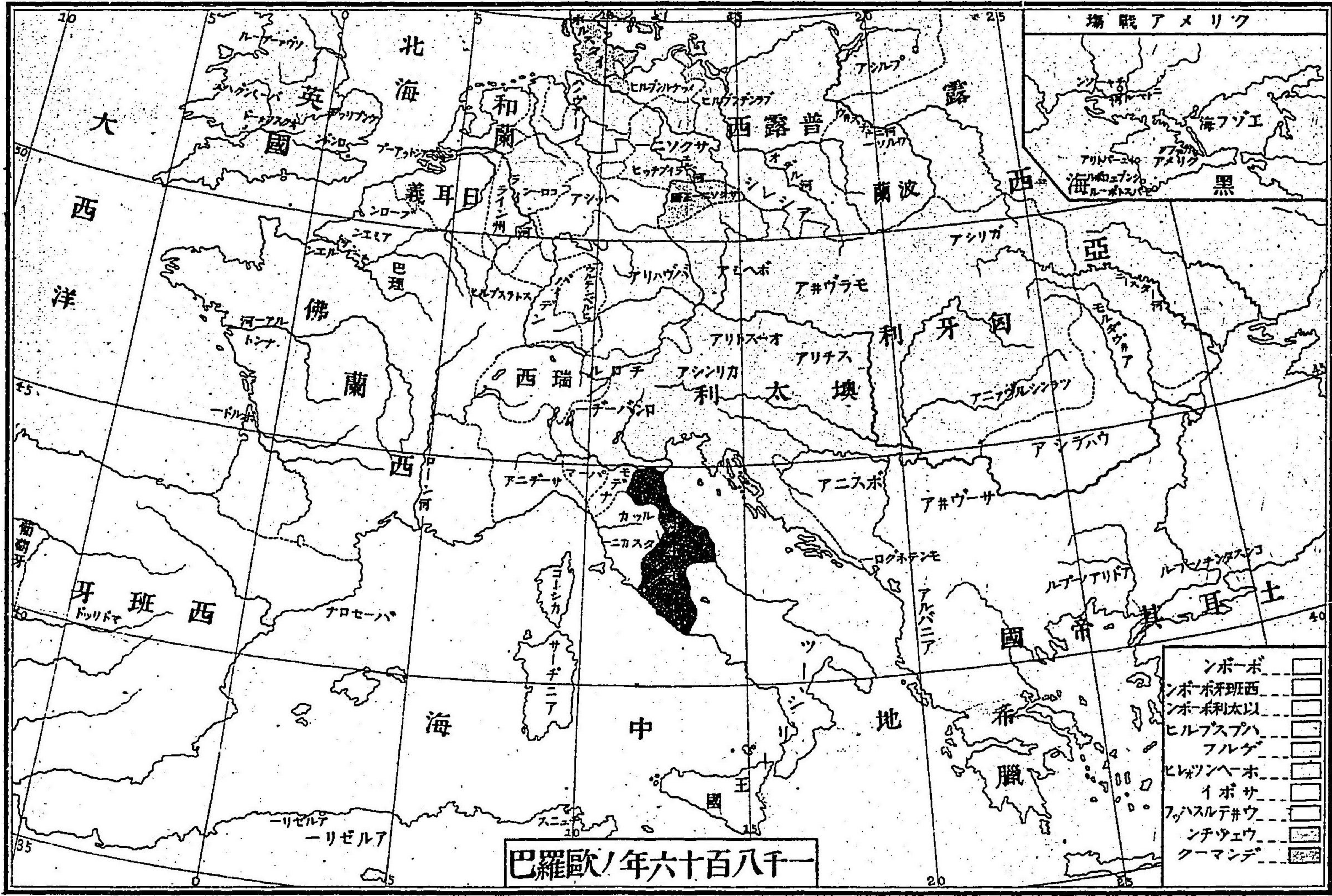




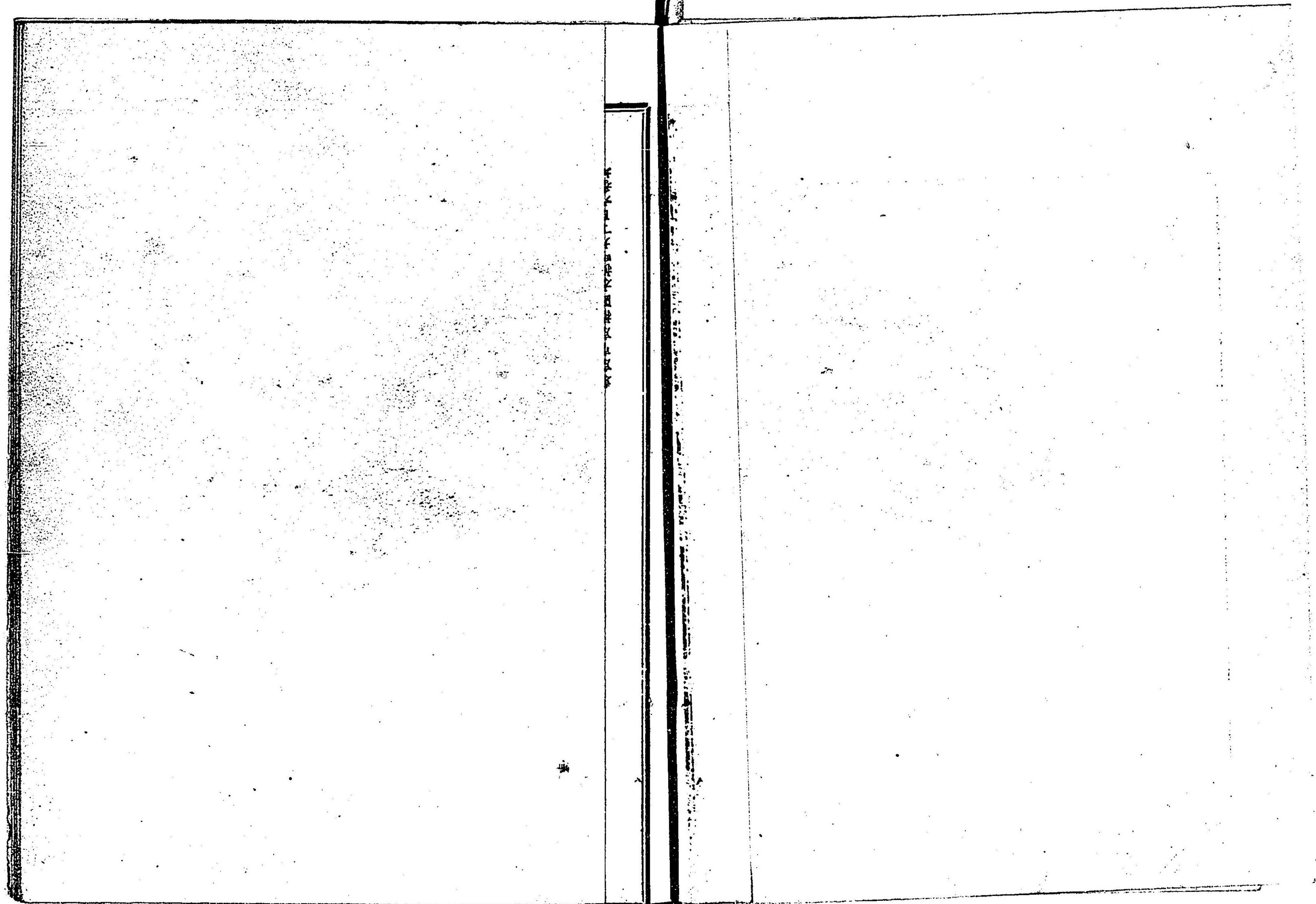


此物外四山皆係外國製造



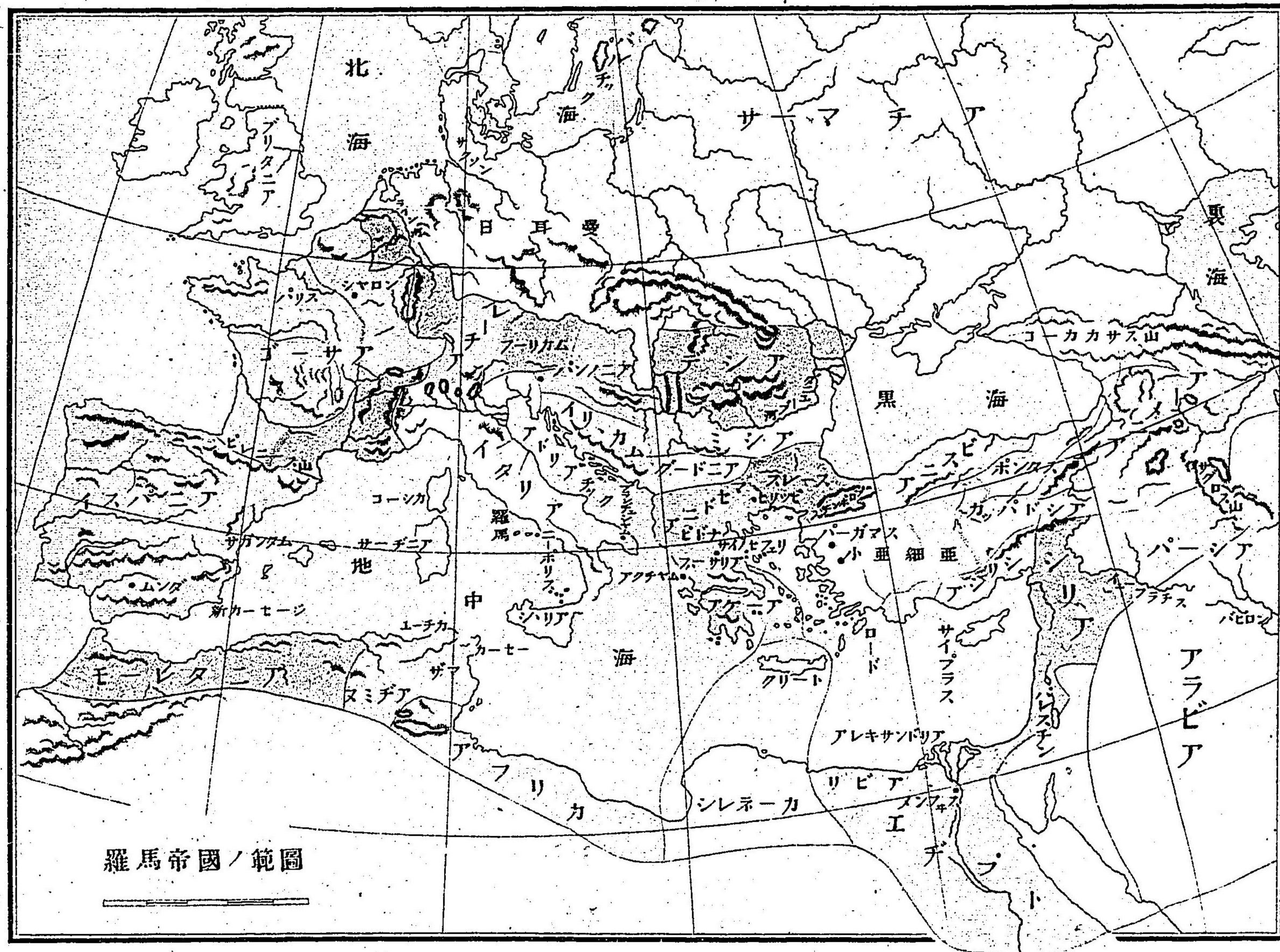






W P T K R B N S N I W K W R



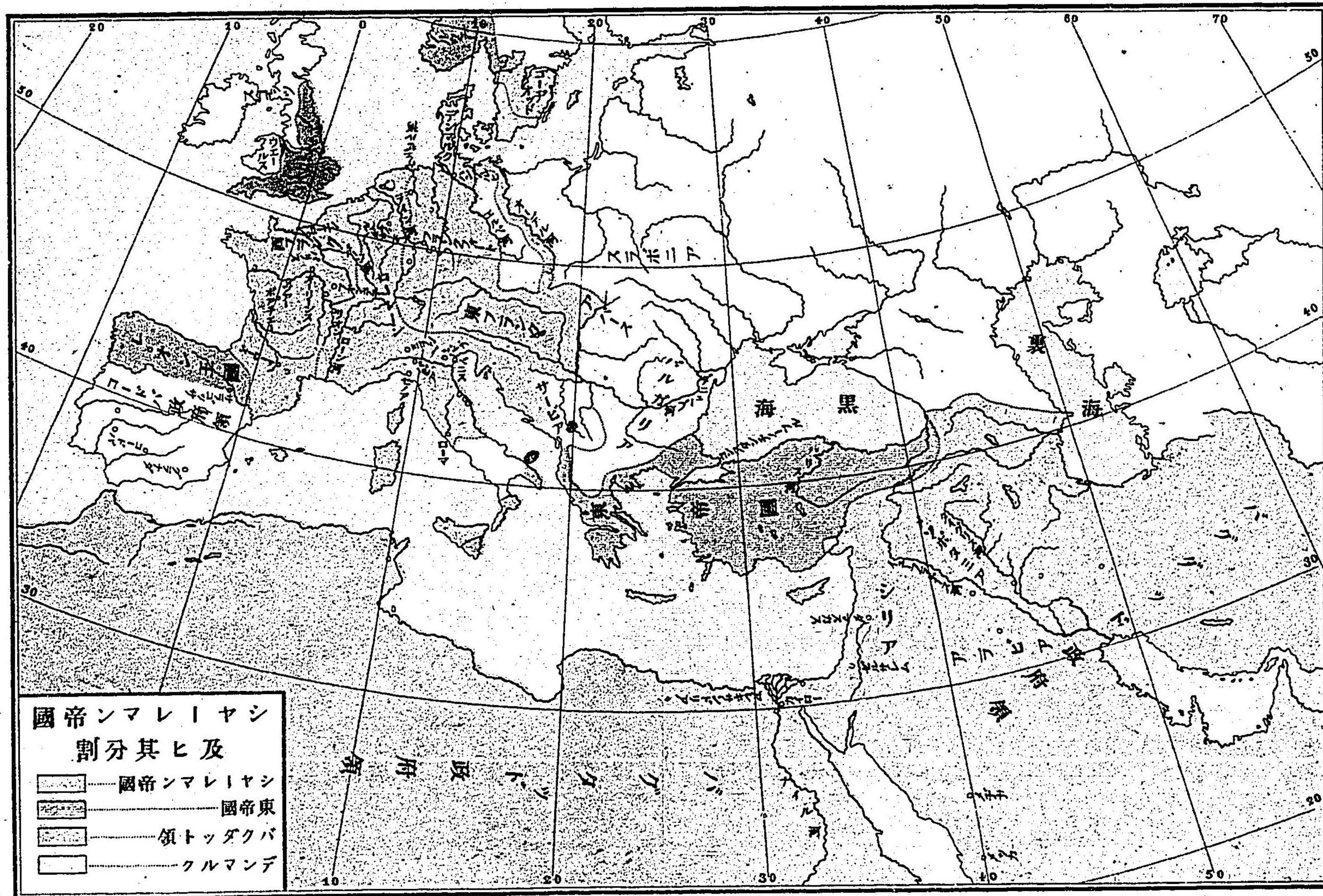


羅馬帝國ノ範圍

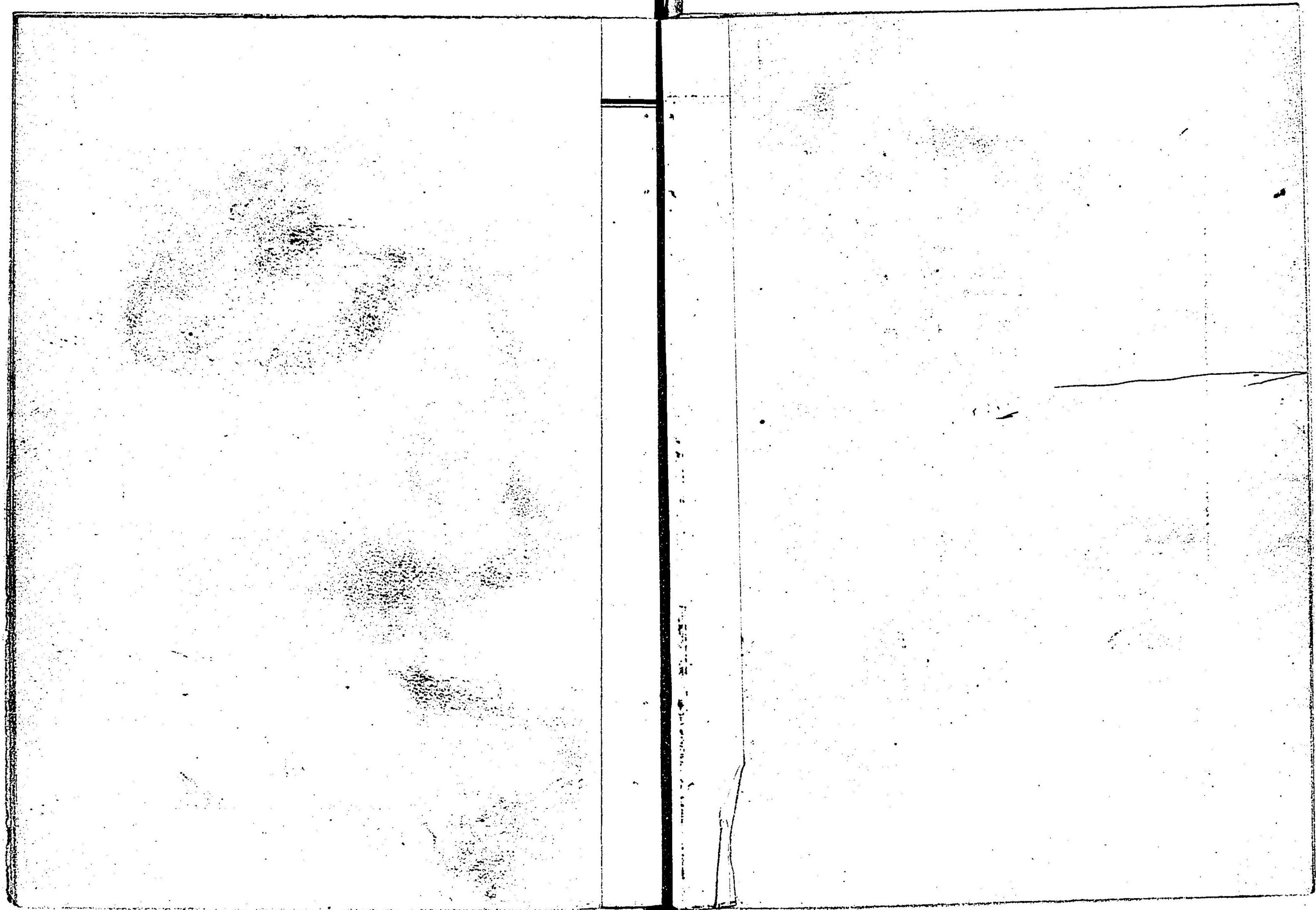


新設正位總圖長卷圖式四小卷

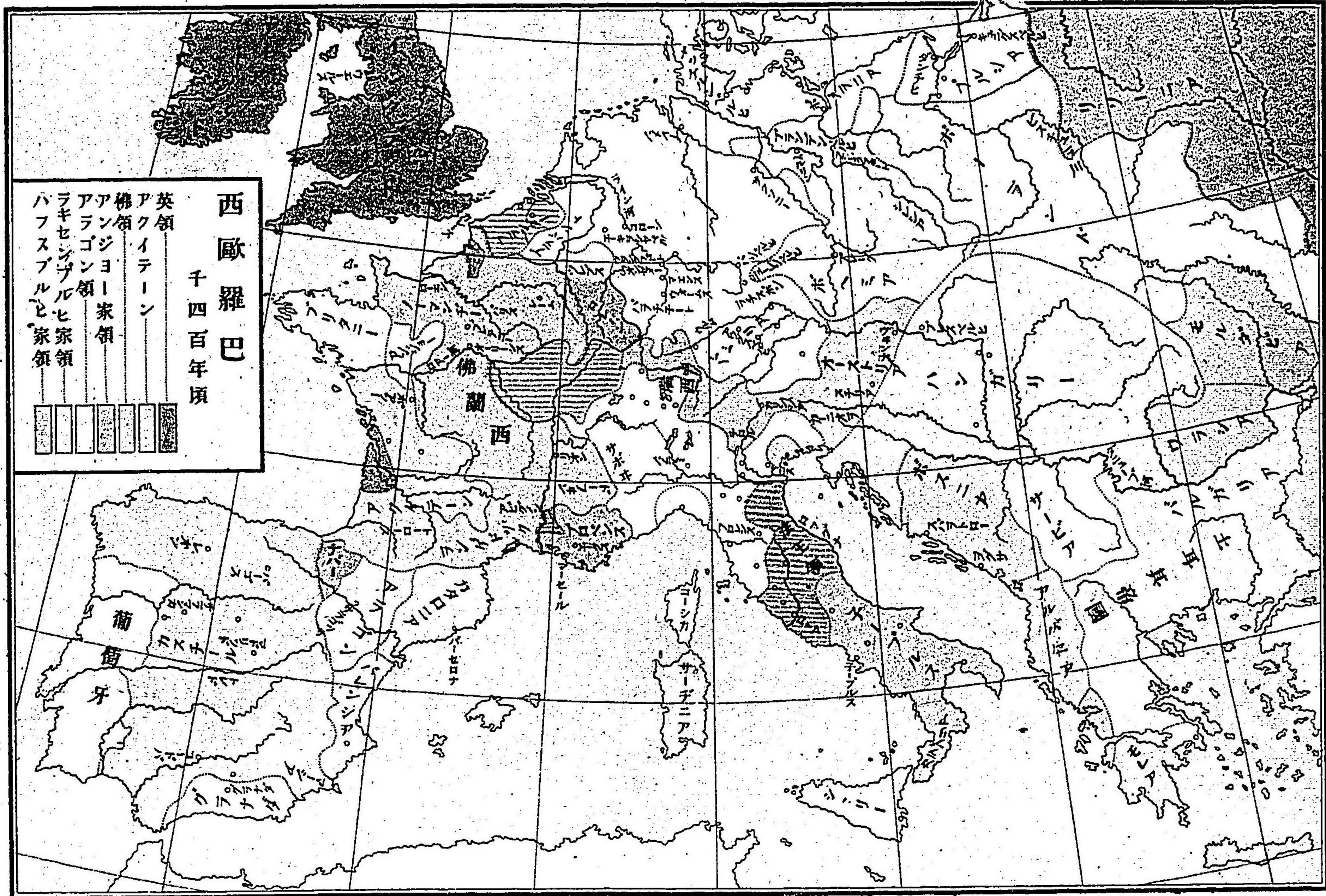












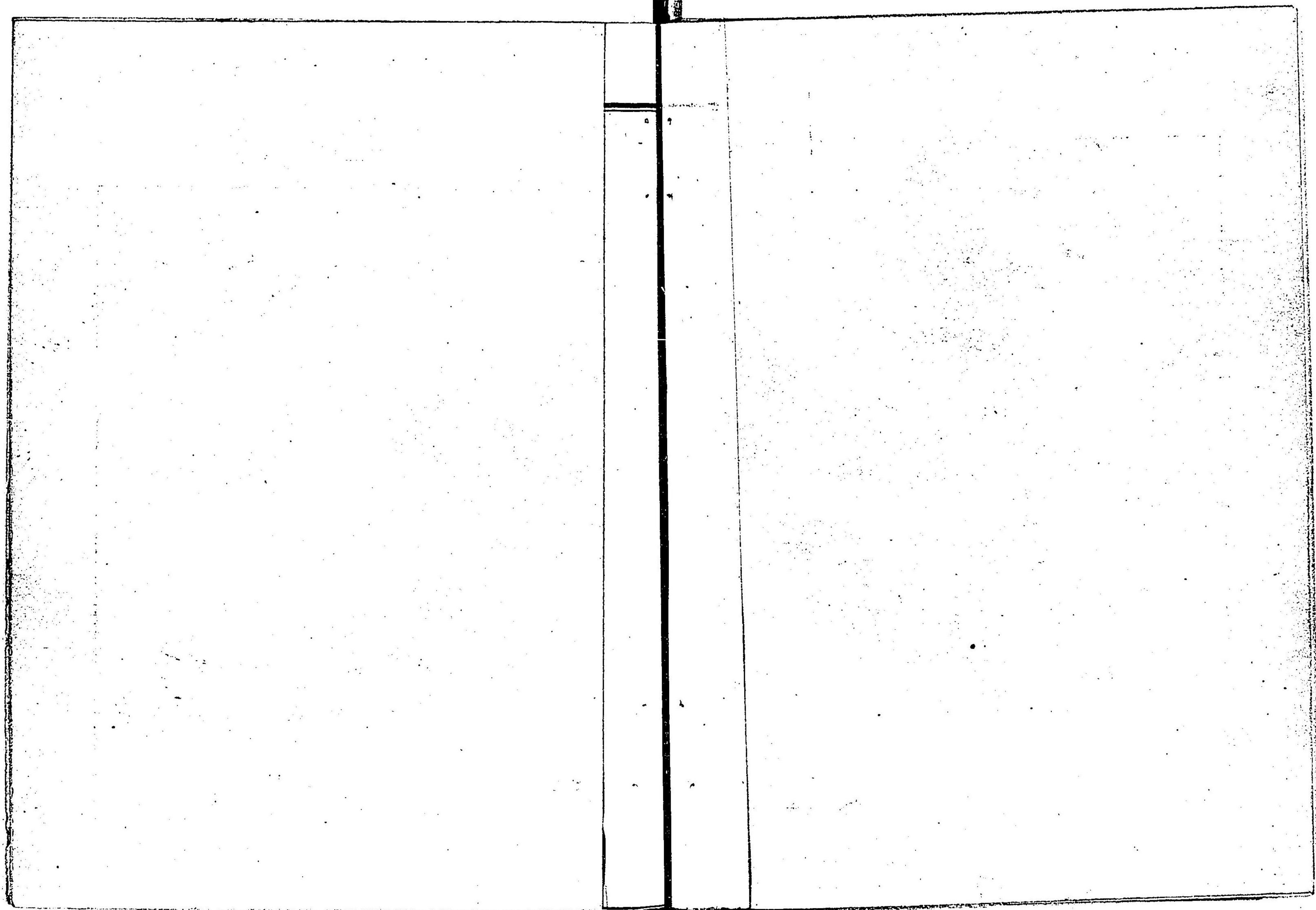
西歐羅巴

千四百年頃

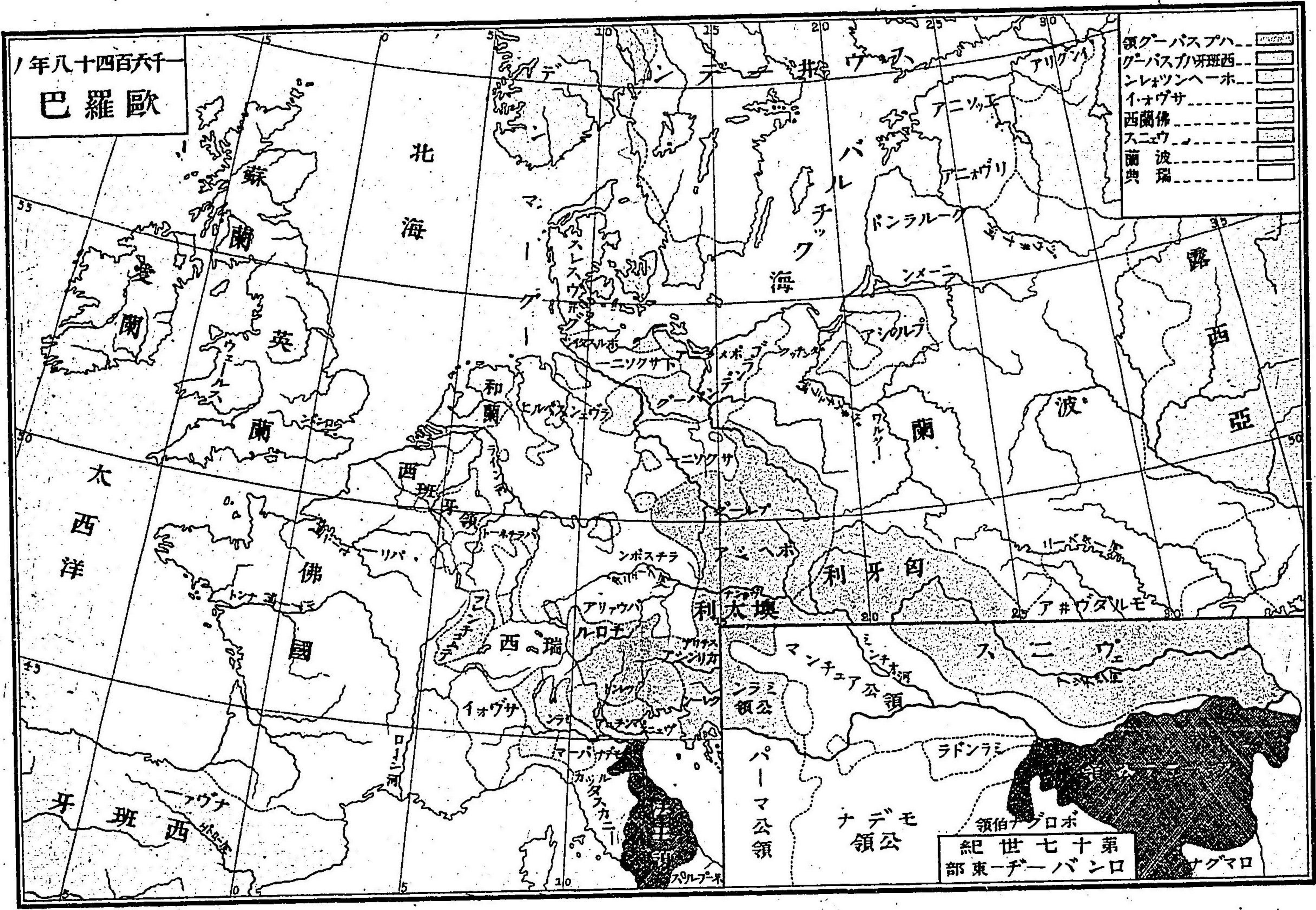
英領  
 フランシーヌ  
 アキテーヌ  
 フランシヨール家領  
 アンジヨール家領  
 ラキゼンブルヒ家領  
 ハフスブルヒ家領









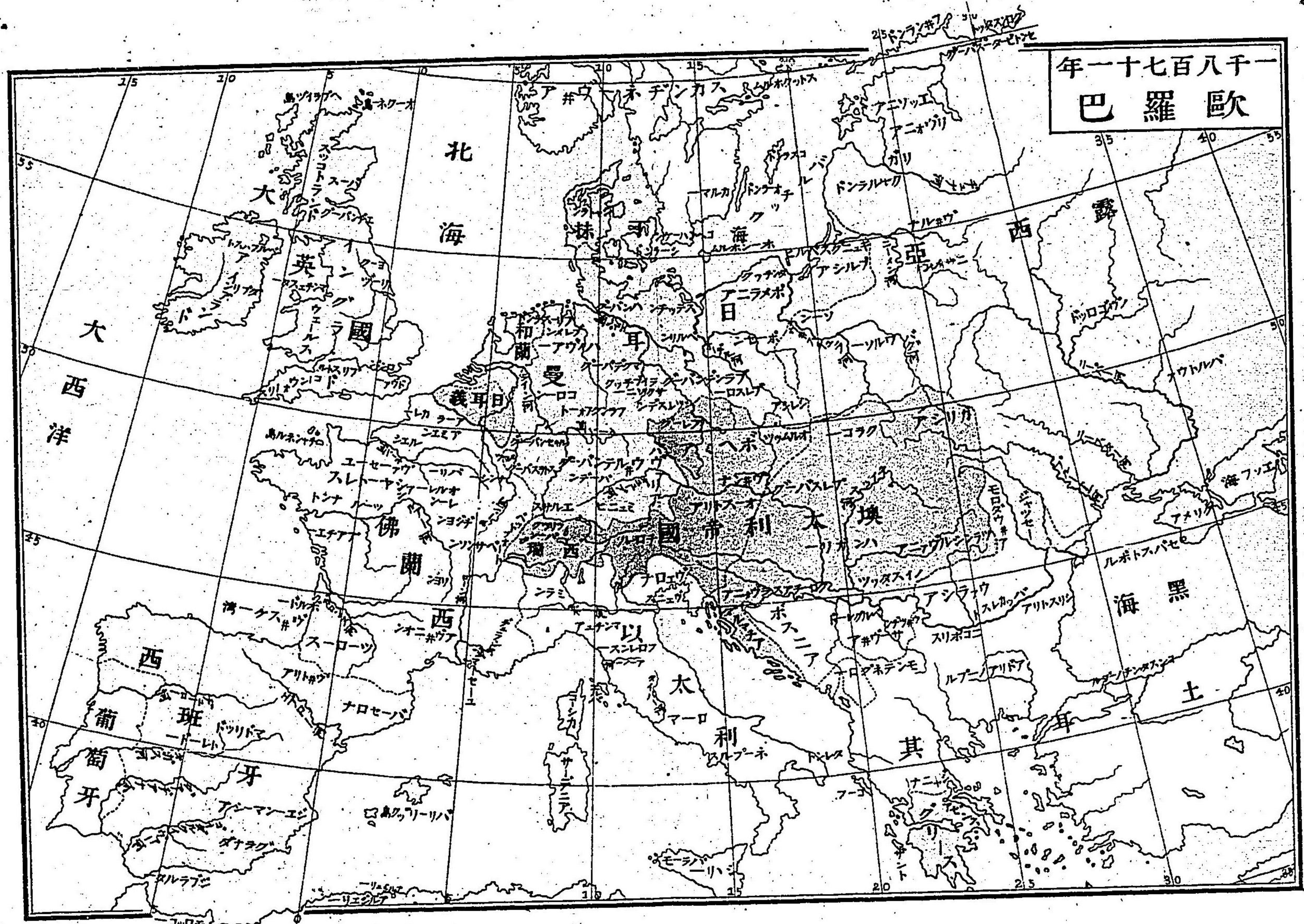






編者 塩井正男

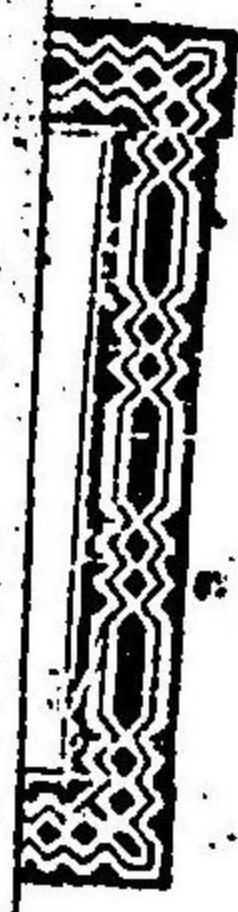




年一千八百七十一  
歐羅巴

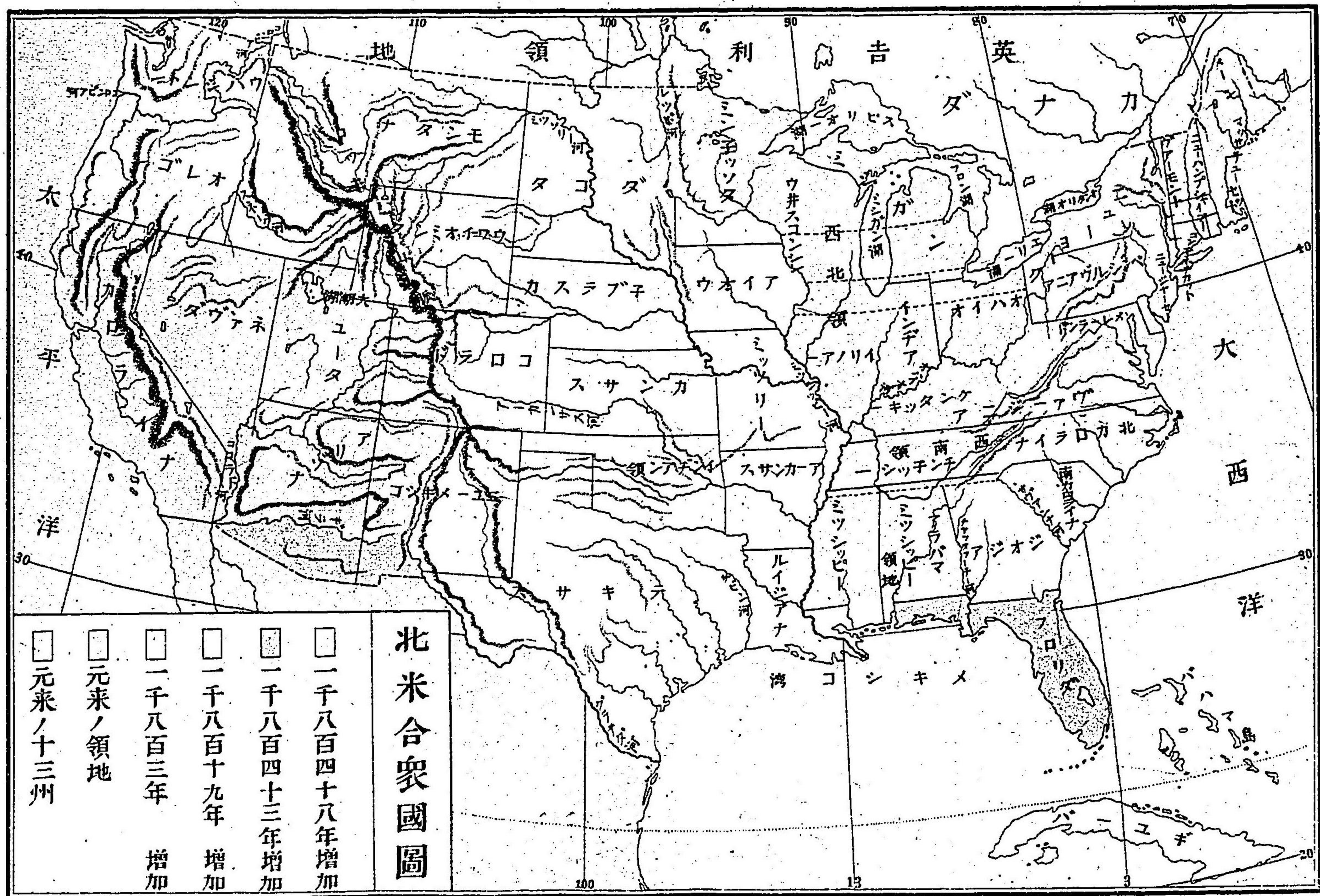
北海  
大西洋  
英  
日  
義  
佛  
西  
葡  
牙  
太  
利  
其  
亞  
露  
西  
亞  
黑  
海  
土  
日  
義  
佛  
西  
葡  
牙  
太  
利  
其  
亞  
露  
西  
亞  
黑  
海  
土



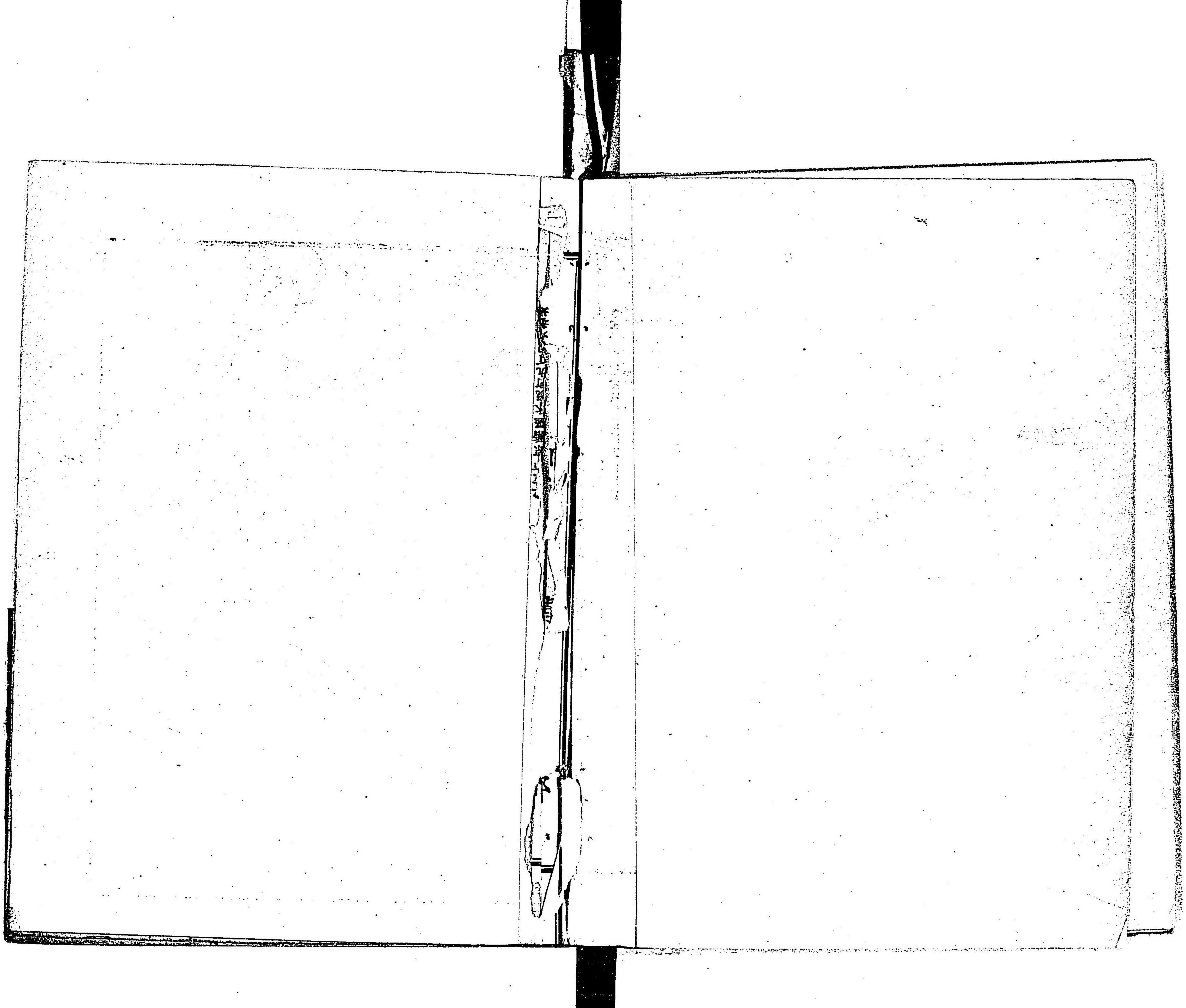


編者  
鹽井正

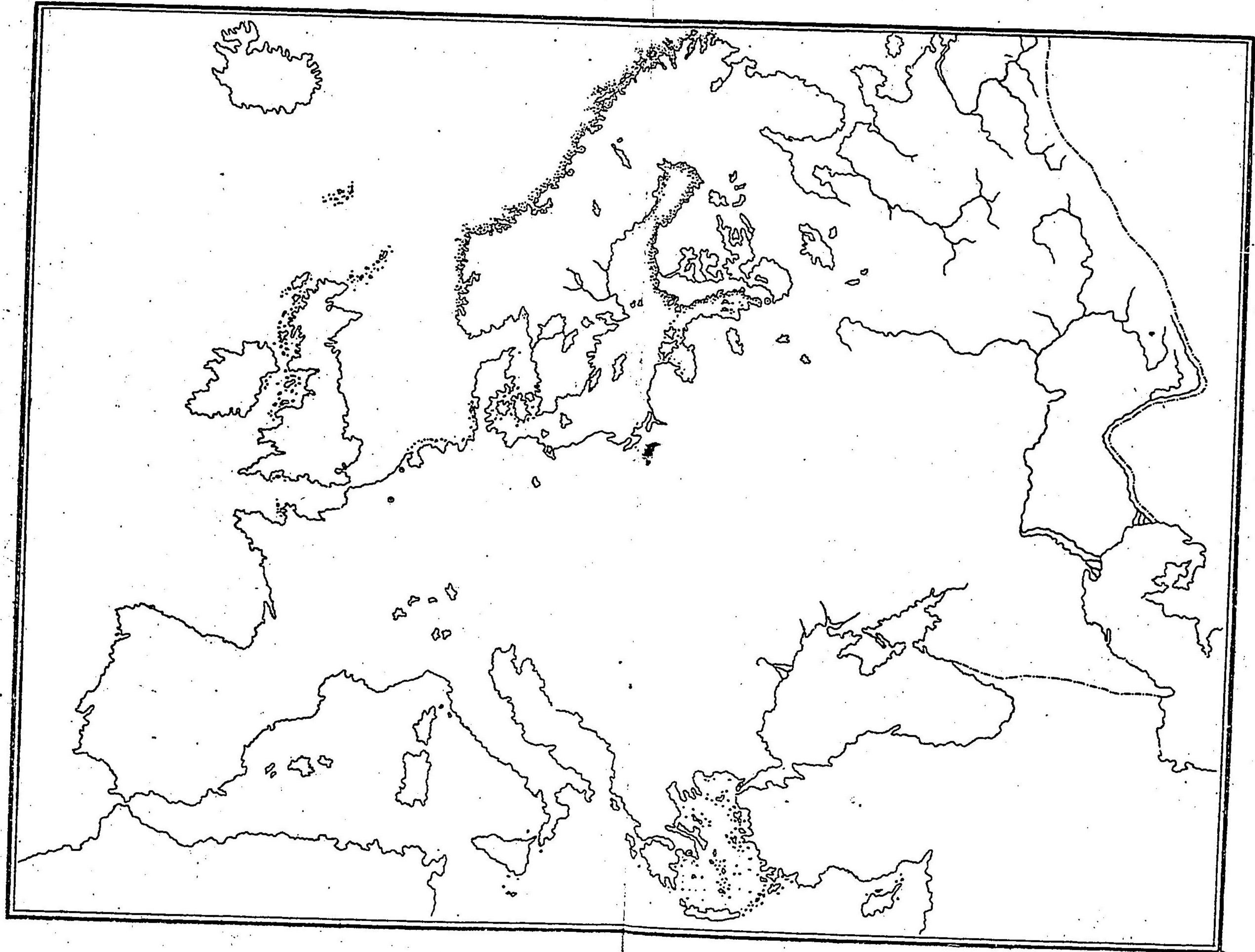














明治三十二年十二月二十五日印刷  
明治三十二年十二月二十八日發行

定價金九十錢



編著者 吉國 藤吉

發行者 內田 淺

印刷者 松本 義弘

印刷所 績文 舍

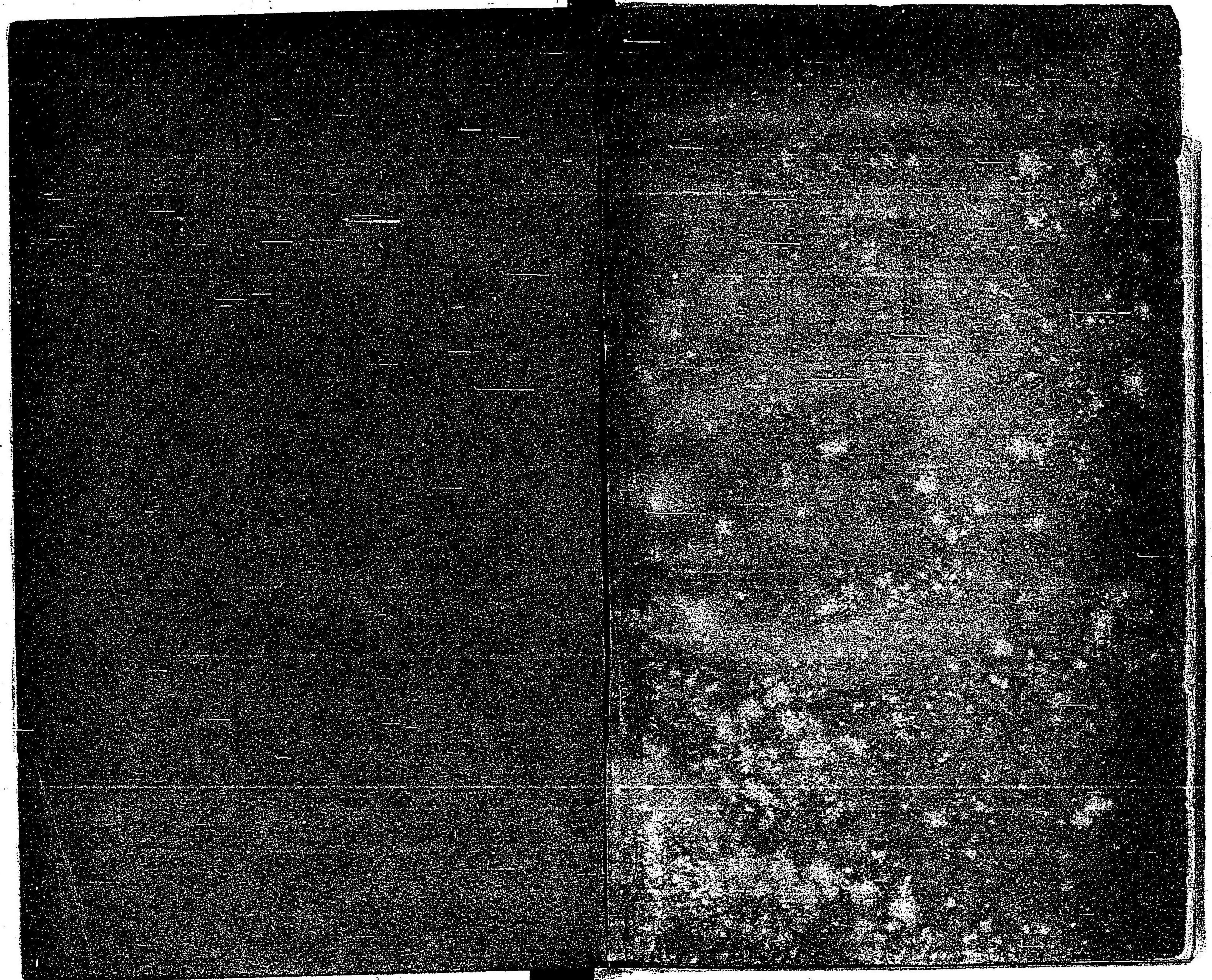
東京市日本橋區大傳馬町二丁目十六番地

東京市京橋區弓町十三番地

同所 電新橋千三百四十八番

發行所 東京市日本橋區大傳馬町二丁目十六番地 內田老鶴圃

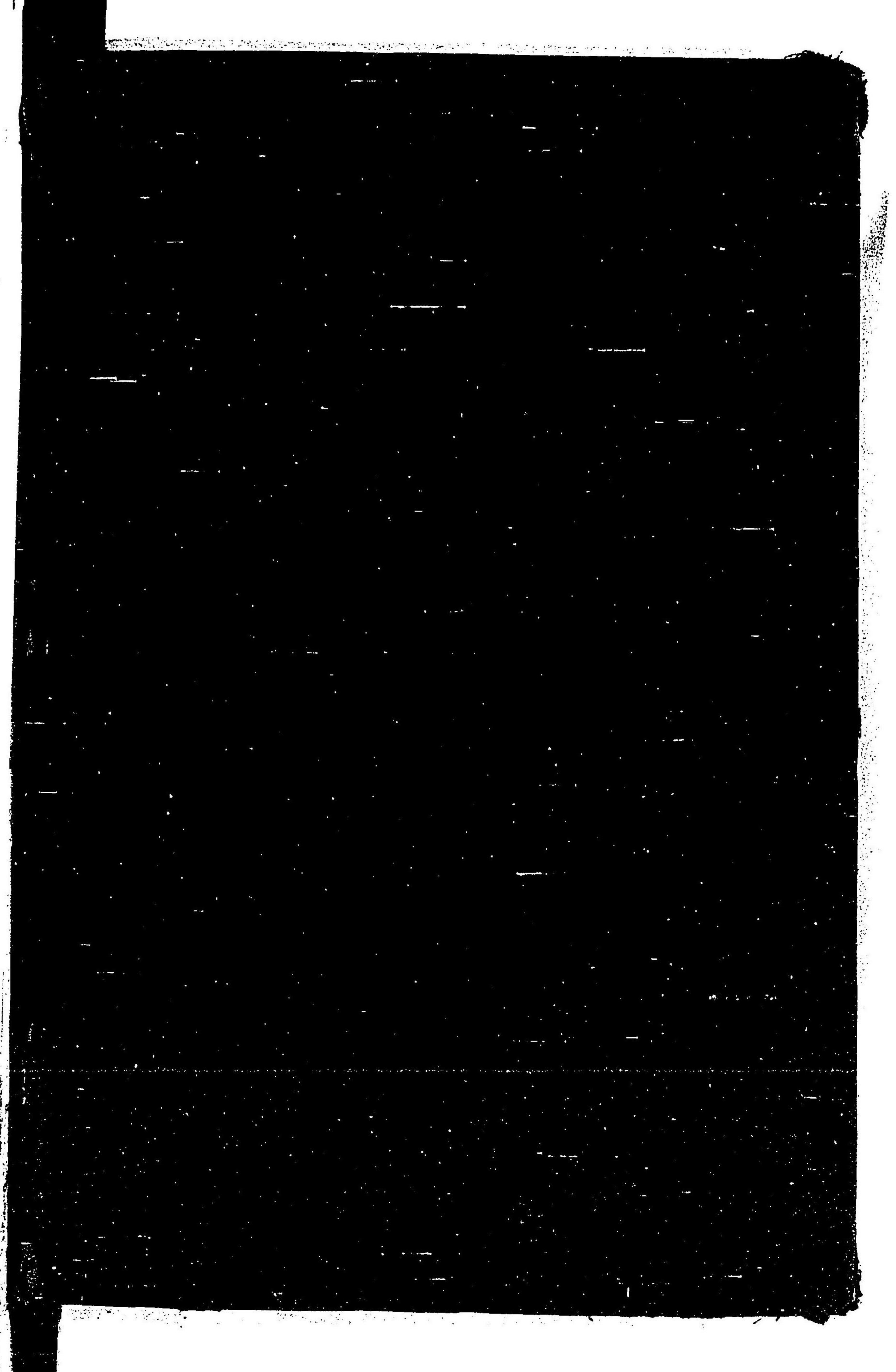






78
198







197

003619-000-7

84-198

西洋史

吉国 藤吉/著

M32

ACD-0206

